
消された記憶＋純白の敵＋

薬剤師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消された記憶＋純白の敵＋

【Nコード】

N9527H

【作者名】

薬剤師

【あらすじ】

これは人気の転生記ではなく、とある不幸な嫌われ者の、儚くも幸せな物語です。読む際には閲覧上での注意、用法・用量をよく読み、医師の相談の下正しくご覧下さい。

成分00：Prologue（前書き）

用法

- 1．時間に余裕があるときに見る
- 2．なんとなく暇なときに見る
- 3．下手な小説として反面教師的な意味で見る
- 4．カップラーメンができるまでの間に見る

用量

- ・1日1回

（それ以上読むと、今以上につまらなく感じてしまう可能性が高い）

2

注意

- ・作者はまだまだ未熟者です。
- ・この小説に登場する呪文、魔法具名は日本語での表記となっています。
- ・主人公に嫌悪感を覚えるお方は、周りの可愛い女の子を重視するようにして下さい。
- ・それでも主人公が嫌なお方は、他の物語を読むことをお勧めします。

・ジンマシン、咳、鼻水、よだれ等のアレルギー症状が出た場合は直ちに閲覧を中止し、他の物語をご覧ください。

ご意見、ご感想、ご要望は、感想にて受け付けています。少しでも何かありましたら、是非お書き下さい。

成分00：Prologue

++Prologue++

強敵なのはわかっていた。集中しろ。何だ…あの曼陀羅みたいな魔法障壁は これで攻撃を防がれていたのか 人間技じゃない…！！！！

ネギはフェイトと生死をかけた戦いをしていた。ネギがフェイトを睨んでいると、ふいにフェイトの姿が消え 左側から強烈なキックが襲い掛かる。そして、2人の間で激しい戦いが繰り広げられる。一般人なら目で追うことすら不可能だろう。

まあ、ネギま！を読んでいる者なら誰でもわかる展開だ。

「それだ…いいよネギ君」

フェイトは薄く笑い、満足気に呟いた。

「それでこそ、だ…ツ!？」

しかし話している途中で、突然フェイトは頭を抱える。さらに体を《く》の字に折った。

「あ、ううっ…!!」

今度は目を見開き呻く。それは彼にとって柄にもなく キャラにもそぐわない。

今からこの物語は始まる。いわば分岐点。ここから先はパラレルワールド。あと『フラグ立ってます』

…これってチャンス、かな？ ちょっと卑怯だけど

少し気が引けたが、そこをネギは見落とさなかった。これを最後の賭けとみて、残りの全ての魔力をフェイトにぶつける。

「獄炎崩山托天掌！」

「……………ッ！！」

フェイトは抵抗すらせずにネギの攻撃をまともにうけ、吹き飛んだ。

「あ、当たった！？」

すんなり技が当たったので、思わずネギが間抜けな声をあげる。

「うくつ……………」

そのフェイトの吹き飛んだ方向と勢いから予想された着地点はさきほどの戦いで彼が自らだした石の槍の山だった。

何かが刺さるような

勢いよく突き抜けるような

液体が飛び散るような

「あ……………」

そんな ヒドイ音がした。

フェイトには石の槍が貫通し、くわえて体中を強く打っていた。

何故ネギ君の攻撃が当たったんだ…？ 僕の障壁は…？ 致命傷はこの石の槍だとしても まあ、今の僕に残された時間は少ない…過ぎたコトを考えている暇はないか

フェイトは、とりあえず…と言って、今やるべきこと・できることをまとめようとする。

今の僕にほとんどできるコトなんてない。ここで延命する必要もない けど僕を慕う彼女達 最期に連絡ぐらいはするべきかな

フェイトは破けた服からおもむろにパクティオーカードを取り出すと、通信機能を使った。

『これは、最期の命令で 遺言だ 君達は、僕の 世界のコトなんか忘れて、自由に 生き、て 』

そこまで言ったとき、フェイトの手からカードが落ちた。手は痺れ、がくがくと小刻みに震えている。もう自分の意思で動かすことは不可能だろう。

しかしフェイトは自分の体など気にせず、深いため息をついただけだった。いや、もしかしたら深呼吸だったのかもしれない。

死ぬなんて、たいしたことじゃない。生き物はいずれ死ぬただ、今回のことは少し… 予定が早まっただけなんだ…

仰向けに石の槍に刺さっているフェイトの瞳に、晴れ渡った青空がうつった。それは皮肉なほどに美しく、フェイトは黙ってただ空

を見る。

心残りはないと思えば嘘になるね。僕の従者達が、変な使命感に 目覚めたりしなければいいんだけど。せめて彼女達には、幸福といえる日々を過ごしてもらいたい

フェイトは、とことん自分に忠実だった、可愛くて有能な従者達を思い出し

「フツ……」

と笑った。

すると突然、今までの記憶がフラッシュバックしはじめる

『あの術が完成されたのですか！ 10年の苦勞が報われましたわね』

『あ、いえ……フェイト様は、観賞する音楽は好きですか？』

『斬ってもうていいですかー？ あう フェイトはんはすぐダメエーゆうて殺生やわ』

『フェイト様のためならばこの焔、いかなることもいたします！ 何なりと仰せ下さいー！』

『この程度のこと、フェイト様のお手をわずらわせるまでもないのですっ にゃ！？』

『大丈夫。私に、任せて下さいデス 』

それは走馬灯というには、あまりに短かった。そして少女ばかりだった。

『ああ？ またお前かよ。いい加減うぜえな　ま、今度こそヤツてやるぜ！』

……と思っただら男もいた。

『悪いな、今日はナギが居なくてよ。だがたまには俺様とやるのもいいんじゃない？』

しかも敵対し、自分を倒した男達だった。しかし、死に際に思い出すには豪華な顔触れだろう。

「結局…僕には、でき………なかった」

そんなフェイトが最期に口にしたのは、愚痴のような、ぼやきのよ様な言葉だった。

そして呼吸が、心臓音が、生命活動が　全てが止まる。

「倒したんだよね……」

少し遅れてそこに駆け付けたネギは、フェイトが死んだことを確認すると、少々辛そうな顔をして去っていった。

残されたのは石の槍の山と

止まった　フェイトだけだった。

成分01：焰ノ助け

十十01十十

フェイト様ッ！

焰は捕獲した明日菜を調に預け、フェイトのもとへと高速で移動していた。

明日菜を捕まえてすぐ、焰にフェイトからの連絡が入ったのだっ
た。

~~~~10分程前~~~~

『『これは、最期の命令で 遺言だ 』』

「 フェイト様?? 」

『『君達は、僕の 世界のコトなんか忘れて、自由に 』』

「 ……どうなさったんです？ 今どこにいるのですか!?! 」

『『生き、て 』』

「 フェイト様ッ!?! 」

『』

『』

「くっ　　！　　姫御子を預け　調が近いか　早くせねば　　！！」

くくくくくくくくくくくくく

その後の焰の行動は、恐ろしく速く…普段より三倍は速かった。まるで赤い彗星のようだった。

どうかご無事で…！！

辺りを見渡すために高く飛んだとき、フェイトの体が焰の目に入った。

「フェイト様ツ！！！」

無惨な姿のフェイトを見て、焰の顔が瞬時に青くなる。早くならかの処置をしなければフェイトの命が危ない　いや、もうすでに死んでいるのだが。

「今すぐ処置を　　」

焰は行動を開始する。

ここでもまた、彼女の動きはハヤテの如くハヤかった。

「貴方様は死にません。　　私が、必ず守ります…！」

焰はすでに死んでいるフェイトにむかってそう言った。言いなが

ら、すぐさまフェイトの傷を魔力で止血し、石の槍から引き抜く。それから治癒魔法で治す…と言っても焔はそんなに治癒術が得意でないので、完璧には治せない。

こっ、このような場合、心臓や息が止まっていたら…じ、人工呼吸をするのだろうか…

治療が終盤に差し掛かった頃…心臓はあまり関係ない気もするが、焔はいたって真剣にそのコトを考えていた。

焔はフェイトの胸部に耳を近づける。

「心臓…動いている」

次に口元に手をかざす。

「呼吸も…して、いる」

どうやら心臓や呼吸の停止は一時的なものであったらしく、治療を終えた時点でフェイトは息を吹き返していた。

「フェイト様…よかった…」

焔はホツとしたような、少し残念なような気持ちになったが、口にしたのはホツとした気持ちだけだった。

そしてフェイトを背負い、自分達の拠点へ向かう。不可抗力とはいえ、焔は自身が敬愛する人物との密着に胸が高鳴る。

しかし、フェイト様ならこんなことはありえない。一体何が

あつたんだ…

(一応) 冷静な焰はこの事態が腑に落ちないらしく、フェイトの顔を移動しながら見つめた。

相変わらず美しい…

そこでハッと我にかえり、頭をぶんぶんと振って考えなおす。  
そう、今は冷静でなければならぬのだ。フェイトの容姿の美しいさについて、思いを馳せている場合ではない。

何があつたにせよ、フェイト様は今この状態 今後はしっかり看病しなければ

焰は足にくつと魔力を集中させる。

貴方様は我が主……私の……私の大切な人なのですから!!

そして一気に加速した。

## 成分02：拭ク＝脱ガス

十十02十十

フェイトを背負った焔は今の自分達の拠点 旧オスティアの廃都に着いた。

「あ、ほむ……フェイト様ッ!!」

焔が到着するとほぼ同時に、調が駆け寄ってきた。傷だらけのフェイトを見て心配そうにしている。

「調、黄昏の姫御子はどうした？」

フェイトを地に下ろしながら、焔は調に聞いた。

「あそこの柱に物理的に縛り付けています。今はまだ寝ているかと」

調は話しながらも、フェイトから目を放さない。そんな調を見兼ねた焔は、ため息をつき、話し始める。

「そうか…フェイト様の傷は概ね治療しておいた。意識を戻されるのも時間の問題だろう」

それを聞いたとたん、調はホツとしたように息をついた。

「 フェイト様あんっ!! 」

今度は奥から曆が出てきた。今にも泣き出しそうな情けない顔で、フェイトの元へと走る。

「 ふえ、フェイト様 傷だらけ 」

しかしフェイトは無事だと焰から説明をつけ、安堵の表情を浮かべた。

「 フェイト様は 」

今度は環がやってくる。いつも表情に乏しい彼女が、今は珍しくオドオドしていた。

「 ……どうせなら説明は一度で済ませたいものだ 」  
「 ……? 」

焰は三度目の説明を環にする。聞き終えた環は、ホツとしたのかフェイトにむかって微笑んだ。

焰 かなり説明をはしょってますね

しかし焰が環にした話しは、調や曆にしたものよりも短縮されていたようだ。

「 でも、おかしいですね。フェイト様がこんな怪我をなさるなんて「そうだよね! フェイト様が展開している魔法障壁なら、これくらいことは防げたはずなんだから」

話しながら、調と曆は眉をひそめた。

焰と環も同じことを思っているらしく、不思議そうな顔をした。

「……とにかく、今はフェイト様が早く治って下さるように看護をしよう。フェイト様が御目覚めになってから、話しを伺えばいい」

この焰の意見には皆賛同したようだ。

「それにしても フェイト様の血って白いんだねー」

曆はフェイトの体を指さした。そう、フェイトの血は白いのだ。だが何故白いかは、どの従者も知らない。

皮肉なことにも、悪党の血の方が綺麗だという言葉が、今のフェイトにはピッタリだった。

「 そうだな。フェイト様が流血なさることなんてなかったから、私も知らなかった」

すると珍しく……あまり喋らない環が口を開いた。

「フェイト様の体を拭いたほうがいい。このままでは不衛生」

たしかにフェイトの服は破れ、体には血が大量に付いていた。しかし《拭く》ということは、同時に脱がせなければならぬということだ。

従者達はごくっ……と唾を飲む。

「じゃあここは私が……」

これは曆。



「いや。連絡をつけた私が責任をもって……」

これは焰。

「私がやりましょう。看護は得意ですから……」

これは調。

「発案者の私が……」

これは環。

目と目の間で、激しく火花が散る。漫画なら背景に《バチバチ》という効果音が描かれただろう。

しかし数分争った結果、全員でやることにした。

「……」

脱がし始めると、先程とは違ってかわってその場は静まり返る。みな、顔が真っ赤だ。

「フェイト様、内出血が多い……ね！ 環！」

暦がその場の空気に耐え切れなかったのか、わざとらしく環に話を振った。振られた環はコクツと頷き、

「重傷」

とつぶやいた。

そしてまた静寂がやってくる。そもそも寡黙な環に話しを振ったところで、続くわけがなかったのだ。

「だいぶキレイになったかと思いますが もうこれでいいですかね」

調のこの言葉が、終了の合図となった。

拭き終わった後に包帯を巻き付け、フェイトを奥にあったベッドに寝かせる。

暦はゆっくりとフェイトに毛布をかけた。

看病は（調の案で）4時間で代わる交代制ですることにした。  
最初の4時間は暦だ。

「じゃあ、頼んだぞ」

焰はそう言って暦を見送る。平静を装ってはいるが、内心かなり心配していた。

「はい！」

しばらくは看護が続きそうだが、フェイトの為なら全く苦勞は感じないだろう…と暦は思うのだった。

それは、他の従者も同じだった。

## 成分03：忘レラレタ月詠

十十03十十

焰がフェイトを背負い、拠点に着いた頃

「センパイ」

「ぐっ！ う」

月詠は刹那と戦っていた。

センパイとこんなにやれるなんて…幸せやわ

フェイトがネギに負けた為、月詠に撤収の命令が出されなかったのだ。

それ故に長期戦となっていた。

このままでは負けるのは私…どうすれば…！

「あーん、さすがにもうボロボロですなー。潮時ってゆるヤツですかあ……残念ですうー」

「なっ、なにを」

月詠と刹那は普通に会話をしているが、元々レベルの高い二人の争いのせいで、その周囲は廃墟になりかかっている。月詠の技で今もまた、出店が一つ崩壊した。

「 センパイみたいな強い女の子に会えて、ウチはほんまに幸せでしたえ」

今度は月詠の剣技が刹那の右腕に当たる。屋根の上で戦っているのもあってか、その衝撃で刹那はよろけ、態勢が一瞬崩れた。

まずい、このままじゃ…態勢を

「でもそれもこれで オワリです」

鈍い音を立てて、月詠の剣が刹那の胸に刺さる。不幸中の幸いかとつさに刹那が受け身をとろうとしたため、急所だけは外れた。

「 あー！」

「ハズしましたか 残念ですわ」

言って月詠は本当に残念そうに眉をひそめ、刹那の胸からズブツと剣を抜く。すると一気に血が溢れ出てきた。

「わー キレイな噴水ですなあ」

刹那から出る血液を見ながら、月詠はにこやかにそう言った。冗談なのか本気なのかは、よくわからない。はたから見れば、イッているとでもいうような感じだ。

すると、どこからか叫び声が聞こえた ような気がした。

「『 氣吹戸大袂 高天原爾 』」

「…んー？」

月詠は辺りを見回す。だが、特に何も見えない。

「神留坐 神漏伎神漏彌命以 皇神等前爾白久 苦患吾友乎 護  
惠比幸給閉止」

「ほえ？ 呪文 ？」

突然、爆風とともに木乃香とラカン（とカモ）が空から降ってきた。そして木乃香が屋根に足を着いた瞬間、唱えていた魔法が発動する。

「『藤原朝臣近衛木乃香能 生魂乎宇豆乃幣帛爾 備奉事乎諸聞食』

「う、 ツ！」

それは1日1回だけ、傷ついてから3分以内なら使える、完全治癒の魔法だった。傷口がどんどん塞がっていくが、それと同時に刹那がうめく。

傷を魔法で治すので、体にも多少は負担がかかるのだろう。

「大丈夫や、せつちゃん。せつちゃんは治るんや」

「…この、ちゃ……？」

少しすると傷口は完全に塞がり、怪我は治った。

「よかったあ！ 空からせつちゃんの怪我が見えた時は、ほんまに心配したんよ！」

木乃香は嬉しそうに刹那に抱き着いた。ただその様子に違和感があるのは、いつもなら慌てるはずの刹那が静かに抱き着かれていたからだろう。

「あれまー。これは皆はんお揃いで」

刹那と木乃香は悪者を倒した後のような雰囲気になっていたが、その雰囲気は月詠のこの一言で壊された。

「まだ悪者は居るのだ。」

「感動的な再開を邪魔するようで悪いんですけどー…お姫様、そこをどいてくれまへんかー？」

言いながら月詠はニコツと笑う。それは営業スマイルのような、白々しい笑顔だった。

「い、いやや！絶対どかへん！」

「ほう…お姫様には何もしとーなかつたんですが、しかたないですなあ…」

月詠は白々しい笑顔のまま木乃香に近寄っていく。

それを見た木乃香の顔が急激に青ざめた。しかし、刹那の傍だけは離れない。

守られてるばかりは嫌や…ウチも…ウチもせつちゃんを守る！

「いけませ、ん お嬢様 逃げ」

「月見乃」

「『秘技・無音めくり術！』！』」

シリアスな展開を無視した声が辺りに響き、どこからか強風が吹いた。

「はれ？」  
「ひゃっ」

そして月詠と木乃香のスカートがめくれる。月詠の服をスカートといってもいいのなら、だが。

「おほ」

さらに、カモがそれを撮影する。  
不思議な流れ作業が成り立っていた。

「可愛いお嬢ちゃんに、そんな物騒なもん似合わないぜ？」

流れ作業を始めた本人、ラカンが月詠に話し掛けた。それを聞いた月詠は一瞬“地”とでもいうような、冷めた表情になる。

「ウチは刀これがないと生きていけへんのですえ……それより、邪魔せんでくれまへんかー？」

だがその表情も、すぐにまたあの笑顔に戻った。

「ウチはかつての英雄はんが相手でも 戦いますよ？」

月詠は剣を構える。戦う気まんまんだ。  
木乃香が心配そうにラカンを見ていた。

「フツ…どうやら俺も“奥の手”を使うしかないようだな」  
「そうきまへんとな 強い人と戦えると思うと、ワクワクしますわ」

しばし無言のまま、二人は見つめ合う。  
凄まじい気の圧力で、大気が震えた。  
そして 先に動いたのは、月詠だった。

「『にとーれんげき・ざんがんけーん！』」

ゆるい言い方だが強力な攻撃が、ラカンを襲う。ラカンは瞬動でそれを避け、他の攻撃は素手で掻き消した。  
今度はラカンのターンだ。

「『羅漢・そよ風爆風拳！ 眼鏡奪取スペシャルウウウー！！』」

ラカンはそよ風なのか爆風なのか、いまいち分らない、かつ長い技名を叫ぶ。

「わぶ！？」

月詠は効果範囲が広い風を避けきれなかった。  
その結果、眼鏡が吹っ飛ぶ。「眼鏡奪取スペシャルウウウー！！」  
の由来はこれのことなのだろう。

そして吹っ飛びそうな程、スカートがめくれる。

「そよ風」の要素は一つもなかった。

「め、めがね〜」

月詠は相当眼が悪いのか、眼鏡が無ければ戦闘不能になるようだ。

「俺はカワイ子ちゃんとガチバトルはしない主義でな。嬢ちゃん達、行くぞ！」



一方ラカンは木乃香と刹那とカモを抱き、逃げて行った。

「はう〜……せっかくの機会でしたのに」

月詠はがっくりと落ち込む。たしかに、ラカンと戦える機会などもう来ないかもしれない。

「でもまあ、よしとしましょーか。刹那センパイとはまた戦えるし、まだフェイトはんから撤収命令も出てないし……」

月詠はあくまで前向きに考える。今流行りのポジティブシンキングだ。

「さーて、どうし……ありゃ？ あれは確か……」

そんな月詠にふと、どこかの国の戦艦が目に入った。それは前に「斬ってはいけない」とフェイトに言われた戦艦に似ていた。すくなくとも眼鏡のない月詠には、ぼんやりとそう見えた。

「少しくらい斬ってもうて ええですよね」

フェイトへの反抗心からか、ただたんに斬りたいだけなのか月詠は、勝手に動き始めた。

成分04：二人キリ

十十04十十

暦と2人きり

看護の為、暦はフェイトが寝ているベットのそばに立っていた。

フェイト様カツコイイ…

暦はフェイトの寝顔を見てときめく。

そしてその視線はだんだん唇に移動していった。

フェイト様の唇かぁ

キス

そこまで考えた暦は、我にかえったようにハツとした。

い、いいくらなんでも寝ている人の唇を奪うのはダメだよねっ

暦は一人で葛藤する。

あ………で、でもでも、よーっく考えたら ちよっとくらいは、  
いいんじゃないかな？

勝手に悩み、

勝手に否定し、

勝手に結論づけた暦は、そう自分に言い聞かせ、顔をフェイトに近付ける。

だんだん鼓動が早くなり、ついに唇と唇が重なり合いそうに

「……暦……貴様……何をしている……」

「ひ、ひに、やあああ……!」

怒気を含んだ焰の声が背後から聞こえ、暦は飛び上がった。驚きと羞恥で猫耳としっぽが逆立つ。

「もう交代の時間だぞ……?」

「に、や、はい……! 後は任せ」

暦は最後まで言い終わらないうちに、どこかへ走って行った。

焰と2人きり

「まったく、不謹慎なヤツだ」

そう言って焰は苦笑した。そして、視線をフェイトに戻す。

人形のように色白のフェイトはさらに血の気が失せて白くなり、もう起きないんじゃないか……と思うほどよく寝ていた。

「フェイト様……」

焰は微かに眉を寄せ、悲しそうに呟いた。

それにしても…眠…い……

そして、少しベットにもたれかかる。

あ、いや、寝てはダメだ。私は…フェイト様、の…看……護…を……

しかし、決意もむなしく寝息をたててすぐに寝てしまった。

フェイトの傷を治したり、ここまで運んだりした焰は魔力も減ってかなり疲れていた。

それに　なにより安心できる人物の傍で、気が緩んだのだろう。

「ん……」

しばらくして焰は目を覚ました。

「フェイト様……… ああああ!!?」

いつの間にか焰はベットに潜り込み、フェイトの横で寝ていた。

超至近距離で見える整った顔の感想よりも、驚きの声が先に出る。

そのとき、少し遠くでパサツ…と何かが落ちる音がした。

「焰、あなた何を……」

焰が振り向くと、調が棒ように立っていた。あまりに驚いた為か、手に持ったタオルを落としている。

ん？　あつ、しまった！　この状況は　！！

そのとき焔は気付いた。

この状況は、はたから見れば怪我をしてフェイトが眠っているのをいいことに、襲ったように見えると。

「ち、違っ…これはそんなことじゃ！ だから、わ…わわわ私は！」

基本的に真面目で純情な焔は、耳まで真っ赤にして必死に弁護を試みる…が、逆に言い訳のようになしか聞こえない。

「ちが、ちちちちがうっ！ 違っんだッ…！」

焔は叫びながら走り去った。

それを見た調は、ちよっとやり過ぎたか、と後悔したのだった。

調と2人きり

「本当に　ちよっとからかったただけでしたのに」

調は走り去る焔を見て呆然とする。またたくまに彼女は見えなくなつた。

「まあ、いいでしょう。少し早いですが…私が看護を始めましょうか」

調はフェイトの体を、持ってきたタオルで拭き始める。看護が得意というのは本当らしく、なかなか手慣れた感じがした。

「これくらいでいいでしょうか」

上手いからか、思いの他早く拭き終わった。フェイトは意外にもかなり寝汗をかいていたらしく、拭き取ったタオルが濡れている。

「タオルを持ってきて正解でしたね」

調はそばにあった椅子に座った。

そして、なんとなく…自然と汗を拭いたタオルを、自分の鼻のほうへ持っていていき

「ハッ……わ、私は何をしているんだか…」

未遂に終わった。

その後、すこしして環が交代しにやってきた。

「……………？ 顔が赤いけど…」

「いえ、別に。あ、あの、後はよろしくお願いします」

恥ずかしさのためか、調は足早に去っていった。

環と2人きり

「……………」

環は静かにフェイトを見守る。すると、だんだん心配になってきた。

このまま起きなかつたら、どうしよう。フェイト様にはご恩がある。それに、なにより私が……

環は顔を赤らめる。

そして、突然思いついたように歌いだした。

「……………」

それは環の故郷に伝わる子守唄だった。環は歌を歌っているうちに、フェイトの顔色がよくなったような気がした。

しかし、それはあくまで気がしただけで、確証のない曖昧なものだ。

もしかしたらこの歌には、なにか力が……

それでも環は交代ぎりぎりまで歌い続ける。

これが、環が今の彼にたいしてできることだから。

今はこれしか、できないのだから。

歌って

唄って

謡って

詩って

ウタツテ

そして、ついに交代のときがきた。暦が歩いてやってくる。

「そろそろ交代の……」

しかし暦はそこまで言っただけで黙った。

少しして暦に気付いた環は、ピタッ歌うことをやめてしまった。

「環、今のは何の歌？」

「子守唄……」

環は一言そう告げた。

もう熱心に歌を歌っていたときのようなく、あんな姿は微塵もない。

「そっか。フェイト様、早く起きるといいね」

「……………」

環は無言のまま、コクツと頷く。いつもと同じ反応、いつもと同じ環だ。

なんとなく環が遠くにいつてしまつような気がした暦は、それを見て安心した。



## 成分05：消工テタ記憶

十十05十十

結局当初の予定を踏み倒し、全員でフェイトを看護することになった。

従者達はベットの周りに椅子を並べて座る。

「別に今までの交代制でよかっただろっ…」

焰がぼそぼそと喋った。

そしてそれを、暦の猫耳は聞き逃さなかった。

「フェイト様に手を出されたら大変…」

暦はフェイトを見ながら小声で喋る。

「なッ…私は手など出して…」

焰は暦の言葉に微妙に心当たりがあるため、返答までにおかしな間があった。

「でも私はしっかり調から聞いたもん」

「し、調！？…貴様…」

焰は調を睨んだ。元々鋭い目が、さらに剣を増す。

睨まれた調は、やれやれ…と言うように首を竦めた。

「あ、あれ…あれは事件だ！ やましいことなどは一切ない！」  
「へー…でも、ならなんで慌てるの？」

その一言で、焔はついにキレた。  
ダンツと音を立てて立ち上がる。

「貴様だってフェイト様にキ、キスをしようとしてたじゃないか！」  
「！」

恥じらいからか、焔の声は少し裏返っていた。  
すると、暦も負けじと立ち上がる。

「あ、あれは…！」  
「何だって言うんだ！！ 寝ている者の唇を奪うなんて…」  
「2人とも落ちついて下さい。ほら、焔も一旦座って…」  
「暦、仲間割れはダメ」

ついに調と環が止めに入った。しかし二人の勢いは止まらない。  
今度は止めに入った二人に矛先が向く。

「……お前もよくもあんなでたらめを喋ったな…！」  
「あ、いや…あれは少々悪ふざけがすぎ…」

焔が調を責める。

「環はどつちの味方なの！」  
「暦…落ちついて…」

暦が環を責める。

「うるさい」

そんな中、どこからか落ちついた声が出た。  
まさに鶴の一声とはこのことで、その場は一気に静まり返る。

「うるさいよ…君達」

ベットを見ると、フェイトが起きていた。

正確には上半身だけ起こして、ベットに座っている。

「フェイト…様…」

環が呆気にとられたようにつぶやく。

するとそれがスイッチだったかのようになり、全員がフェイトのもとへ押し寄せた。

「フェイト様！！」ご無事でなによりです」

環は立て膝をつき、

「痛むところはありますか？」

調は体の調子を聞き、

「……大丈夫ですか？」

環は心配したように言い、

「あの…その…よ、よかったです」

暦はしどろもどろながらも喜びを伝えた。  
しかし、フェイトは彼女達を冷たい目で見ただけだった。それ以外、なんの反応も示さない。

「…フェイト様？　どうかありませんでしたか？」

そんなフェイトに違和感を感じた暦が、軽く質問をする。  
しかしそれを無視して、ふうん……とフェイトは呟いた。

「僕はフェイトというのか……」

その場にいた全員が、一瞬フリーズする。

今の言葉は明らかにおかしかった。

たった今、初めて自分の名前を認識したような。

今まで自分の名前を知らなかったような。

まるで自分の名前を忘れていたかのような彼の言葉に　彼女達は驚いた。

「　で、失礼だけど君達の名前は？」

従者達はその言葉にさらに驚く。フェイトは冗談を言うような者ではない。

「フェイト様？　何も…何も覚えていらっしやらないのですか？」

焰はできるだけゆっくりと、丁寧に聞いた。

「覚えていない？　僕は何か覚えていたのかい？　それとも　今の僕は君達が知っている僕とは違う　のかな？」

フェイトは首をひねって、逆に焔に尋ねる。  
口調も一人称もそのままだ。でも何か足りない。  
記憶が、足りない？

「ああっ！！」

突然、暦が立ち上がった。そして従者達を呼び集める。

「わ、私、旧世界の映画でみたことあるよ。気持ち悪い生物をみた  
ニンゲンは、M I Bに記憶を消されるって」

怖い話しを語る人のように、暦は喋った。最後に「信じるか信じ  
ないかは、あなた次第です」と言い出しそうな雰囲気だった。

「それは確かな情報ですか？」

調が恐る恐る聞く。確かな情報なら本当に恐ろしすぎるからだろ  
う。

「うん。旧世界の都市ではよくあることなんだって」

暦は断言した。よくあることではないと思われるが、断言した。  
というかそんなことがよくあっては困る。

「その えむあいびー…？ とはなんの略なんだ？」

今度は焔が暦に尋ねる。もっともな質問だ。

「えっ あー……そういえば、Mといえばメガロメセンブリア…だ

よね」

暦は知らないくせに適当に言ってみた。ちなみに、メガロメセンブリアなら「MM」になるので違うだろう。

だが焰は暦の発言を疑わなかった。

「メガロメセンブリア上層部が、フェイト様の記憶を消したということか！」

それどころか、まとめた説明を行っている。何故か「上層部」が勝手についている気がするが、誰も気にはしなかった。

「メガロメセンブリアにとって、世界救済を目的としたフェイト様は邪魔だったのでしょう。だから記憶を……」

「……許せない……」

調と環は、メガロメセンブリアに激しい憤りを感じているようだ。もはや、気持ち悪い生物をみたニンゲンはMIBに記憶を消される、という設定は消えている。のこる「E」と「B」が何の略なのかも忘れられているが、やはり彼女達は気付かない。だが気付かない理由は明白だった。

「フェイト様あん！」

「フェイト様ッ」

「フェイト様！」

「……」

フェイトが好きだから　だ。

恋は盲目だった。

「……………」

急に話し掛けられたフェイトは、素早く従者達のほうを振り向く。

「メガロメセンブリアに心当たりはございませんか？ あ、私は焰といえます」

「私は暦です、Mって文字には?!」

「私は調です。オスティア、ゲートポートなどの単語に覚えはありませんか？」

「……………環……」

フェイトは突如質問攻めにあう。環は自己紹介だけだったが。

「焰君、メガロメセンブリアに心当たりはない。今初めて聞いたよ。暦君…これといってMから連想する言葉はないね。調君、それらの単語にも覚えはない。環君…はなにもないか」

フェイトは全員にきちんと返答した。聖徳太子になれそうだ。

「やっぱり ダメかあ」

暦が残念そうにつぶやく。それにともなつて、環と焰ががっくりとする。だが、調は何かを決意したように立ち上がった。

「あなた様の名前はフェイト・アーウェルンクス。私達はフェイト様の従者です」

フェイトの頬に手を触れて、その目を見据えながら調がそう言い始めた。

「従者？」

「はい。私達はフェイト様に命を救われました。それからずっと、私達はあなた様に仕え…従ってきました」

調は淡々と説明を続ける。

他の従者達も、フェイトに今までであったことを話した。

こうして、長い長い夜は続いた。

フェイトに全てを話し終えたときには、もう次の日の夜だった。



成分06：女装。拒否権八無イ

十十06十十

「……そうか」

全てを聞いたフェイトは、疲れたように下を向いた。

「今の話を聞くと 君達には迷惑をかけることになりそうだね。なんせ何も覚えてないというんだら、申し訳ない」

フェイトは下を向いたまま続ける。

心なしかその表情は、苦しそうな……もどかしそうな感じがした。

「迷惑だなんて、決してそんなことはありません」

「そうです。フェイト様はフェイト様、謝る必要など微塵もございません」

焰と調がたて続けに喋る。

「……ありがとう」

フェイトは顔を上げて、焰と調を見ながらそう言った。二人は思わず赤面する。だが、暦と環はその横で「むー……」とむくれていた。暦と環には気付いていないらしいフェイトは、話しを進める。

「じゃあ……早速で悪いんだけど、何か服を貰えないかい？」

俯きながらそう喋った。

確かに、今フェイトは包帯を巻いているだけでほとんど裸だ。

しかし怪我の箇所が多いこと、規模が大きいこと、男性であることが合わさってあまりエロくはない。

「でもフェイト様の服は破れていますし、あとある衣服といえば……」  
「私達のこの服……だね」

言いかけた調の言葉を曆が引き継ぐ。

「しかしこれは女物だぞ!？」

焰が2人に向かって言う。心なしかその頬は赤い。

「……背に腹は代えられない」

環がボソツと言った。やはりこちらも頬が赤い。

彼女達はフェイトが記憶喪失であるのをいいことに、普段は絶対にできないであろうことをやりたがっているのだった。

「……やっぱり、僕はこのままでも」そうですね。じゃあ私の予備の服を持ってきましょう」

フェイトの言葉は調に遮られた。

服を取りに走って行く調を見て、なぜかフェイトは汗が出た。

「君達、聞い」調のならフェイト様も、余裕で着れますね」

今度は曆に遮られた。

フェイトは故意に遮られているコトに気付き、なんとかこの場の流れを変えようとする。

「だから僕は「持って参りました」

「ではフェイト様を今からこの服に着替えさせていただきます。失礼をお許し下さい」

焰が丁寧にことわる。

どうやら流れは変えられなかったらしい。

これから自分がどうなるかを理解したフェイトは、ベットの上で後ずさる。走って逃げようにも、裸なのでベットから出られない。それに怪我也治ってない。“後ずさる”ことは今の彼にできる精一杯の抵抗だった。

「いや…だから僕は」

「あきらめて下さいデス」

環がとどめをさす。

「……………ッ！……！」

声にならない叫びが、フェイトから出ていた。

~~~~~3分後~~~~~

「む、う……………」

フェイトはすっかり従者達の服を着せられていた。

女物の服を着るなんて恥だ。こんな、理不尽な…

『シャレにならん…』

『似合いですぎていますね』

『フェイト様可愛い…』

『お揃い』

従者達は頬を染め、小声で喋りあう。

確かにフェイトは似合いですぎていた。顔が整っているからか、全く違和感がない。ちよっと大きめの調の服が、ダボツとしていてさ
らによかった。

「……。」

フェイトは無表情ながらも照れていた。

そして、それがまた一段と可愛い。

何故だか彼女達にかなり見られている気が…まあ、こんな服だから仕方ないのだからうけど。……ものすごく、ここにいずらい。ちよっと違う場所へ行きたいな…

「…そうか。違う場所へ」

いいことを思いついたといわんばかりに、フェイトは逃げ出した。ベットを蹴って走り去る。その超人的な脚力で、ベットは2つに割れていた。

「にゃ、フェイト様!?」

「お待ち下さいフェイト様!」

「そちらに行つてはなりません」

「あ」

暦、焔、調、環が止めようとする。だが当然追い付かない。

「……………!」

このままフェイトが逃げ切るかと思われたが　彼は突然、倒れるように、腹を押さえてうずくまった。

どうやら治りかけの傷が開いたらしい。服の腹部に血が滲み出る。

「あんだ…フェイト?」

そして運が悪いのか否か、フェイトが倒れた場所には神楽坂明日菜がいた。

「僕のコト、知ってるのかい?…あ…ああ、君が神楽坂明日菜か」

明日菜は可愛い格好ですましてものを言うフェイトを見て、ぷつぷつと何かがきれた。

「ぶ…ぶぶつ…あ、あはははははは!　な、何よその服!??
ひ、ひー…あはははは!　お腹、お腹痛　あはははは!」

フェイトは自分の姿をながめ、むう　と黙りこくる。

「貴様!!　フェイト様になんて失礼な」

フェイトを追ってきた焰が、笑う明日菜を見て怒った。

「似合うと言われても、嬉しくないんだけれど…」

「あ、すみませんッ」

焰は素直に謝った。それは相手がフェイトだったからかもしれない。

「まあ、いいんじゃない？ す…すごく可愛いわよ」

明日菜が冗談まじりに言う。

そして、聞こえなかったのか、恥ずかしくて返答を拒んだのかフェイトはそんな明日菜の言葉を無視して話す。

「神楽坂明日菜…君は帰りたいとは思わないかい？」

突然話しだしたその内容に明日菜はもちろん、従者達まで驚いた。

「仲間のもとへ…ひいては君達がいた世界へ、帰りたくはないかい？」

「へ？」

「僕が君を、君達を帰してあげようか」

「なっ……あんだ、それ本気なの？」

この時点でフェイトの意図がわかるものは、誰一人としていなかった。

成分07：白髪ト赤毛

十十07十十

「僕が君を、君達を帰してあげようか」
「なっ……あんだ、それ本気なの？」

フェイトは明日菜に、自分が記憶喪失だということを話す。

「今のあんたを見てると、なーんか納得できるわね……」

話し終わると、明日菜がそう呟いた。

たしかに今のフェイトは表情こそないものの、記憶喪失前よりもだいぶ物腰が穏やかだ。敵である明日菜がわかる程の変わり様だった。

次にフェイトは、無条件に明日菜をネギ達のところまで送っていくと言った。もちろん、誰も傷つけない。

「でもそれ、嘘かもしれないじゃない。あんたは今まで私達を……酷いめに遭わせてきたわけだし」

遠回しにフェイトは批難された。覚えのないことを責められるというのは、なかなか理不尽な感じがする。

「そう言われると、何も言えないね。けど……」

フェイトは明日菜を拘束していた鎖を、魔法の射手で破壊した。鈴が鳴ってはじけるような、美しい音がした。

「フェイト様、一体何をなさるのです!？」

フェイトの行動に疑問を感じた焰は慌てて叫ぶ。しかし

「今、僕は彼女と話しているんだ。邪魔しないでくれるかい？」

「えっ?……あ…すみ、ません…」

焰にたいするフェイトの対応はあまりに酷かった。焰も返事がしどろもどろになる。

それにドライアイスより冷たい目で、ギロツと睨みながら言うのだから、また一段と恐ろしい。眼から冷凍ビームが出ていそうだった。

「話しを中断させてすまない。で、少しは僕のことを信じてくれたかな？」

フェイトは縮こまる焰を無視して、明日菜に話し掛けた。

「これも作戦かもしれないじゃない…あと、そんな格好で言われても説得力ないわよ」

するとフェイトはまた黙りこくった。今彼は従者の服(女物)を着ているのだ。

ピラーンとスカートをつまんで、しげしげと恥の塊である自分を見つめる。

「…とりあえず、ネギ君のところまで送るよ。服はローブでも着ていく」

そう言うと、フェイトは明日菜に背を向けて奥に行った。

フェイト様、何故…あのようなことを……

そして情けない顔をした焰は、ただ立ち尽くすことしかできなかった。

「焰！ 焰っ！！」

哀愁漂う焰のモノローグで終わるかと思われた今回の話は、終わらなかった。調が拠点にあるスクリーンを見て、焰を呼んでいる。

「 どうした」

焰はフェイトからつけた対応がショックだったのか、機嫌が悪い。そのため（ただでさえ悪い）目つきがいつそう険しかった。

「これを見て下さいっ」

調はスクリーンを指してそう言った。そこにはニュースが映っている。

『先日から建物、戦艦、銅像等が倒壊する被害が出ています。調べによるとこの被害は全て一人の人間によるものらしく、捕らえに行つた戦乙女騎士団員は全員負傷した状態で帰還しているとのことです』

猫耳ニュースキャスターのお姉さんがそう言っていた。そして、画面は現場の状況を映し出す。

『ふふ』　今まで禁止されてたんやから、今日はパーッと斬りますえー』

画面中央に「容疑者の少女」とテロップがでる。
事件の犯人は月詠だった。

「…あの人のことを忘れていたな」

「いますぐ呼び戻しましょう！」

~~~~~数分後~~~~~

明日菜はフェイトに抱かれて飛んでいた。

フェイトって、結構いいヤツ…なのかも

明日菜はじい…っとフェイトを見つめる。その視線に気付いたフェイトが明日菜を見ると、なんだか気恥ずかしくなり、すかさず目を逸らした。

やっぱり、そんなわけないか

「もうつくよ。迎撃されないか心配だ…まあ、万が一を考慮して、注意はしておいてね」

フェイトが冗談か本気かわからないことを言った。無表情なので、本当にわからない。

「……私がいるから、あんたに魔法はあたらないわよ」

「……やれやれ。君は本当に馬鹿だね」

フェイトはため息と共にそうつぶやく。

「なッ！」

「君を盾にできるわけないだろう」

そんなことを真顔で言うフェイトに、怒りかけた明日菜はすこしドキツとした。

~~~~~

<ネギま部金魚型飛行魚（グレート・パール様号）デッキ>

「ちっさーん！ ごめんな。い！？」

千雨を追って走っていたネギが、変な言葉を発した。理由は、デッキが爆発したからだろう。

「げほっ…なんだよ…ごぼっ…この、煙は…??」

走っていた千雨は突如上がった煙に咳込んだ。
状況がまったく読めないネギは、万が一に備えて闇の魔法を発動させる。

そんな中、ネギは誰かに後ろから抱き着かれた。

「…………ネギっ！」

「明日菜さん！ ってアレ？ ……明日菜さんはさっき木乃香さんと刹那さんと一緒に出かけて…？」

そう言っただけ振り向いたネギの目には いくつかの日のように煙の中で悠然とたたずむフェイトが映った。

先程の爆発の正体は、物凄い勢いで着地したフェイトと明日菜だったのだ。

「フェイト・アーウエルクス？ そんな、倒したはずじゃ…？」

ネギの手の模様がギョルギョルツとろずく。

あの時、倒せてなかったのか？

「はじめまして。赤毛の……君が、ネギ・スプリングフィールドだね」

「はじめまして、だと？」

ネギはフェイトの言葉に激しい疑問を感じた。というより今は、彼の存在自体を不思議に思っている。なんせネギにとってフェイトは、倒したはずの敵なのだ。

あいつのことだ。何か意味が…裏があるに違いない。 そう

だ。話しを続けていれば、いずれ、何故あいつが生きているのかもわかるだろう

「ああ。君とは《はじめまして》だ」

ネギ達に向かって歩きながら、フェイトは話しを続ける。

「ふざけるな！」

ネギはカツとなり叫ぶ。そして宿敵、フェイトを睨んだ。何度も出会ったフェイトに『はじめまして』などといわれ、からかわれているとでも思ったのだろうか。

一方、フェイトはそんなネギを品定めをするように見つめた。

そしてフェイトとネギが（ある意味）見つめ合う中、千雨は呆然としていた。

登場するときにデッキの床板壊すなよ！ てかその神楽坂はなんだ？ ちくしょう……ネタバレはまだなのかよ！

どうやら、こっちはこっちで困惑しているようだ。

「ネ、ネギせんせー。今の音はー…？」

微妙な空気の中、爆音を聞き心配してきたらしいのどかが、デッキに上がってきた。

「のどかさん！ 来ちゃダメですっ！！」

ネギの声に、のどかがビクツと反応する。

そんなネギの言葉に何を感じたか、フェイトが静かに口を開いた。

「僕は戦いにきたんじゃない。むしろ君とは戦いたくないんだよ…
ネギ君」

「どつという意味だ!!」

ネギはいまだに警戒を解かない。対してフェイトは肩の力を抜き、
ふー…と息をついて言った。

「君に助けてほしいんだよ、ネギ君。僕には…君が必要だ」

成分08：鬼神ノ童謡

十十08十十

「君に助けてほしいんだよ、ネギ君。僕には…君が必要だ」

フェイトは自分が記憶喪失になった、とネギ達に説明をする。

「何を言ってるんだ…？」

ネギは露骨にその言葉を疑った。普段誰にたいしても好意的な彼が、こういった表情を見せることは珍しい。

「信じてもらえないか。僕って他人からの信用が相当無いんだね」

フェイトは怪訝そうに眉をひそめ、ため息をつく。

その時にふと、彼の目にデッキに立つのどかが入った。

「……そうか」

フェイトは縮地レベルの瞬動で、のどかの背後に立った。

「あっ……」

「のどかさんっ」

ネギが瞬動でのどかの元に向かうが、フェイトが展開した大型の対物魔法障壁がゆくてをはばむ。

「がッ!……うっつ……」

高速で移動していたネギは、思いきり体中を打った。

「危害を加えるようなコトはしないから、黙って見ていてくれるかな?」

フェイトはネギを軽くあしらい、次にのどかに話しかけた。

「君がミヤザキノドカ……たしか読心術師だったね」

息がかかる程の超至近距離に立つフェイト。
のどかは焦りながらもそれを悟られないように、努めて冷静に答えた。

「は、はい。その通りです」

「やはりそうか……君に頼みがある。僕の心を読んでくれないかい?」

「えっ?」

フェイトの言葉にのどかは驚き、素直に声が出てしまった。

あ、あれー? なんてそんなコト言っただろう……あっ、でも、心を読んで私達が不利になることはないハズ、なら……

「……わかりました」

むしろ私達が有利になれる！

フェイトは、のどか程高度なものではないが、読心術を使うことができる。

「じゃあ、頼むよ」

なのでのどかの気持ちを理解したとき、わかつてはいたものの、やはり疑い無く行ってくれることはないかと、少々悲しくなった。

「『アデアット』」

心が読まれていたなどは微塵も思わないのどかは、自らのアーティファクト『いどのえにつき』を出す。

「フェイトさん。あなたの目的はなんですか？ 何故私達の前に現れたんですか…？」

だが、いつまでたっても日記に文字は浮かばない。つまり、フェイトの名は正しくないということだ。

「偽名…：フェイトさん、偽名を使っているんですか？」

「そうゆうつもりはないけど…」

フェイト自身も、自らの名を知らないらしい。

しかたがないので、のどかは《鬼神の童謡》を使う。

「『我 汝の真名を問う』」

鬼神の童謡が宙に描いた名前は

《T e r t i u m》

綺麗な飾り文字でそう描かれていた。
フェイトの真名を知ったのどかは、改めて問い掛ける。

「テルティウムさん…あなたの目的と、私達の前に現れた理由を教えてください…」

「テルティウム？」

今度はポウツ と日記に文字が浮かび上がった。

それと同時に、フェイトの口から疑問が零れる。が、あまりに小さい声だったために、他人がそれを聞き取るコトはなかった。

《僕の目的・現れた理由》

「一つ目 神楽坂明日菜を君達に返して、ある程度の信用を得る
こと」

「二つ目 ネギ君達と関わって、失った記憶を取り戻すこと」

のどか仕様なので、内容に伴わず愛らしい日記となっている。

《9月31日テルティウム》

「……やれやれ。僕が過去に君達に何をしたのかは知らないけど、君達の態度から見ると相当酷い事をしたようだ。そもそも無い信用を取り戻すのは、無理だしね。

まあ、とにかく今は記憶が欲しいんだ。何か凄く大きな…大切なコトを知っていた気がするから」

のどかが読み終えた頃合いを見計らって、フェイトが彼女に話しかける。

「わかったかい？ 僕は紛れも無く記憶喪失なんだ。それに君達に

対して、敵意も害意もないんだよ。すくなくとも今はね」

フェイトはのどかから距離をとりながらそう言った。

「でも記憶が戻ったら、また、僕達に何かするかもしれないじゃないか……！」

フェイトの言葉を聞いたネギが、体を起こしながらいう。目の鋭さも、先程よりはるかに増していた。

「そんなことはしないよ。何かするとしても、そのときは一回出直す」

「そんな……それなのに、お前に協力しろっというのか！」

コイツは敵だ。倒すべき敵……協力なんてしてられないんだ！

ネギは新たに敵意を燃やす。一昔前の熱血漫画なら、瞳の炎が燃えていただろう。と、そのとき

「あ、あのー……ネギ先生。この人、フェイトさんは信用してもいいと思います」

真剣な眼差しでのどかがそう言った。その発言にネギは勿論、フェイトさえも驚く。まさかこんなにあっさりと信じてもらえるとは思っていなかったからだ。

「の、のどかさん？ だってコイツは、のどかさんを石化したんですよ……？」

ネギはあまりに驚いたためか、少々早口にそう喋った。

「 わかっています」

しかし、のどかもむやみにこんな発言をしたわけじゃない。

のどかにはわかったのだ。『いどのえにつき』を通じて、フェイトの気持ちがある。その気持ちが真つさらで嘘など1つもないことがわかったからこそ、ネギに協力を促した。

僕はこの人達になんか話を…信用されないわけだ…

そんな中、2人の会話を聞いてフェイトはひそかに落ち込んでいた。表情には出ないものの、少し感情が豊かになっているようだ。

「ネギ、私もちよつとのどかちゃんの見解には賛成…かもよ」

「おい、神楽坂まで何言ってるんだよ！ あ、いや、てかそれ以前にお前は本物なのか？」

（千雨はさておき）明日菜も今のフェイトを悪くは思っていないようだった。

「明日菜さん…」

ネギは、今度は辛そうな顔をする。また何が正しくて何が悪いのかわからない、といった様子で。

「それでも、ダメです…」

しかし、彼は決意した。

仲間達のために、『ただの人』であるフェイトの記憶捜しに《協力しない》と。

「たとえ君がフェイトとは違うフェイトで、僕達の敵じゃなくても…。僕は…僕はやっぱり協力なん」
「ね、ネギ先生！」

ネギが自らの決意を言い終わらないうちに、突然のどかが叫んだ。その場にいた全員の視線が彼女にそそがれる。

「フェイトさんを……フェイトさんを助けてあげましょう…！…き、協力してあげましょうっ…！」

成分09：交差スル信頼

十十09十十

「フェイトさんを……フェイトさんを助けてあげましょう!!…き協力してあげましょうっ!!」

「……」

「おい！ 宮崎!!?」

「ダメ、ですよ……!!」

明日菜とフェイトは黙って聞き、千雨は驚きの声をあげ、ネギはのどかの発言を認めなかった。

「先生として、友人として、認めることはできません!」

「い、嫌ですっ」

「彼に協力することは、僕達にとって危険な事態を招くことになります!」

「で、でも……でも！ ネギ先生は、ちゃんとフェイトさんの話を聞いたんですか?」

「！ それ、は……」

ネギは黙る。たしかに、のどかの言うとおりなのだ。正論には反論できない。

「……ネギ先生、チャンスを下さい。私はフェイトさんとお話したいんです。それだけなんです」
「だけ、ど」

ネギはまだ納得していないようだ。露骨に迷いの色が浮かぶ。

「私を信じて下さい。ネギ先生」

「はいっ」

しかし、ついに承諾した。

ネギはギリツと歯を噛み、拳を握りしめて自分の気持ちを押し込める。

内向的なのがここまですのだから、何かあるのだろうとネギは思ったのだ。理由はたったそれだけだが、それだけで信じられるくらい、彼はのどかを信頼していたのだ。

「ありがとうございます。ワガママを言ってごめんなさいです」

のどかの言葉にネギはうなずき、2、3歩後退した。

『おい先生、あんなこと言っているのかよ』

『……のどかさんがあんなにいうんだから、きっと大丈夫です』

『ただどあいつは敵の親玉だぜ？』

『いざとなったら、僕がすぐ助けに行きます』

小声で話し合う千雨とネギ。千雨はまだフェイトのコトを訝いぶかっているようだ。

『まあ そういうことだから、心配いらないわよ千雨ちゃん。それにあいつ、な〜んか』

『な〜んか？ 一体なんだよ？』
『……やっぱり、なんでもないわよ』

な〜んかあいつ……変わったのよね

そんな中、途中から会話に参加した明日菜は、一人飲み込んだ言葉
を心の中で唱えるのだった。

「どうして僕なんかを……」

今まで黙っていたフェイトは、ネギ達との話しが終わったとみて
のどかに問い掛けた。

「……？ フェイトさんの目的は、私達と関わることじゃないん
ですかー……？」

のどかは可愛らしく、不思議そうに首を傾げた。それもそのはず、
フェイトは自ら協力を頼んできたのに、承諾したら何故協力するの
かと聞いてきたのだ。

さっきまでとはあきらかに態度が違う。

「僕は君達を殺そうとしたんだろう？ そんな輩やからのいうことを、君
は聞き入れるのかい？」

「フェイトさんは過去の記憶がないんですから、昔のコトは関係な
いですよ」

それでものどかは、その問いを真摯に受け取り返答した。

「…今のフェイトさんは、現在いまを生きているんですから」

天使のような微笑みだった。暖かくて、柔らかくて、優しい全てを包み込むような表情で、のどかはそう言ったのだった。

ああ、そうか。彼女は本当に僕を

微笑むのどかを見た瞬間、フェイトは決意する。

「…そうか。 そうだね。 そうかもしれない」

しかしその決意を実行するには、犠牲が必要だった。

「でも、そんな簡単に…」

フェイトは無詠唱で、のどかの顔の正面数センチの距離に石の槍をだす。

「…そんなふうには、簡単に決めていいのかい？ 僕はこんなにも、簡単に君を屠ほぶることができるのに」

のどかは一瞬驚いたように固まった。だがすぐに落ち着きを取り戻した。この魔法世界で、彼女の経験値は確実に上がっているだろう。それこそ、レベルアップするほどに。

「……『アベアット』」

「そんなコトをしてどうするんだ？ まあ、あんなものがあつたところでは、あまり意味はないだろうけど」

「誰かと話すときに、心を覗くなんてことは ダメですから」

のどかは自らの最大の武器、アーティファクトをしまった。彼女はフェイトと話すのに『いどのえにつき』は必要ないと思ったのだらう。

「素直で優しい、直心の持ち主か。しかし敵にたいしてそんなコトをするなんて、ただの愚直なお人よしだね」
「フェイトさんは敵じゃないですっ」

のどかが抗うように声をあげた。ぶんぶんと、残像が出るほどすごい勢いで首をふる。

「僕がいうのもなんだけど、ヒトの性分：性格は、記憶などがあってもなくても変わらないんだよ。やはり君と僕は敵だ。この事実もまた……変わりはしない」

そんなのどかを窺^{たしな}めるように、フェイトは言った。
顔は無表情だが、その瞳だけは何故か哀しみの色^たを湛^たえていた。

成分10：涙、泪、ナミダ

十十10十十

「僕がいうのもなんだけど、ヒトの性分…性格は、記憶などがあってもなくても変わらないんだよ。やはり君と僕は敵だ。この事実もまた……変わりはない」

「そ、そんなこと、ないです」

のどかはフェイトの言葉を否定する。そして目の前で静止している石の槍を避けて、フェイトに向かって歩いてきた。

「……？ 宮崎のどか。僕の言っているコトの意味はわかっているよね？」

「わかっています。わかっている……つもりです」

しかしのどかは止まらない。どんどんフェイトに近付いていく。

「フツ…死にたいのかい？ もしそうなら、君の要望に答えてあげるけど」

「ち、違いますっ。フェイトさんが嘘をついているって、わかっているつもり……です」

「嘘？ 僕は嘘なんか」

「いいえ」

のどかはフェイトの正面まできて止まった。

「それも嘘、ですね…」

「……！」

武器もない

戦闘能力もきわめて低い

特殊な力があるわけでもない

【ただの女の子】

宮崎のどか

フェイトはたった今彼女に負けた。

「私はフェイトさんに協力します。 迷惑だなんて思ってません」

……だ、だからもう、嘘つかないで下さいっ」

「フン。 僕は嘘なんか…… あれは本当に 「

ぎゅっ、とのどかがフェイトを抱きしめた。

「……………！」

「アーティファクトがなくなってもわかりません。それが嘘だって。だってフェイトさん、とっってもいい人なんですからー…」

フェイトの眼から涙が零れ落ちる。

彼は無表情のまま泣いていた。しかし泣くというよりは、「目の涙腺から分泌される体液が流れ落ちる」といったほうが似合うような感じがする。

今まで黙って見ていたネギ達も、のどかのとった行動とフェイトの反応には、驚きを隠せないようだ。口はポカンと開き、目が点になっている。

「……………」

ふと、フェイトが何か呟いた。しかしその声が小さすぎて、抱きしめているのどかにさえ聞こえない。

「……？」

のどかが不思議に思っていると、フェイトが《ニイツ》と口を開いた。相変わらず涙は出ているので、かなり不気味で滑稽な表情になる。

「違うと言ったんだよ　　僕はいいい人なんかじゃない。ただの道具だ」

今度は他人にも聞こえる音量で、そう言った。
そしてのどかを冷たく突き飛ばす　　同時に

「フフフ、フハハハハハ」

フェイトは笑った。

「フェイト…さん？」

彼は顔を下に向け、ただひたすらに嗤わらっていた。

「フハハハハ！」

すると突然、デッキに石の槍が生えてきた。

「きゃ!?!」

「うおっ…先生!?!」

「のどかさんっ、千雨さんっ」

「ネ、ネギ!?!」

石の槍は物凄いスピードで、次から次に新しいものが生えてくる。どうやら、フェイトの魔力が暴走しているらしい。ネギの魔力の暴走よりも、はるかに殺傷能力が高い。

「ハハハハハハ!」

暴走は止まらない。

それどころか、新たに空から石柱まで出てきた。

「千雨さん、のどかさん、ここは危険です。行きます! しっかつかまって下さい!」

「お、おう!」

「ひゃっ!?! あっ は、はいっ!」

デッキにいと危険なので、ネギは千雨とのどかを杖にのせて空を飛ぶ。

しかし明日菜は彼女が持つ力故に、杖に乗せることができなかつた。

「あ、アスナさん! 大丈夫ですか!」

「ネギ、やばいわよコレ! このままじゃ船が壊されちゃうって!」

ネギは明日菜の身を心配して「大丈夫か」と聞いたのだが、明日

菜には違う意味で伝わったらしい。

「…アスナさん自身は大丈夫そうですね。　えと…アスナさん、フエイトを止められますかー？」

「うん…　反撃してこなかったら大丈夫だと思う」

「じゃあ　すみませんが、フエイトを止めるのをお願いします」

「わかったっ」

明日菜は持ち前の能力で石の槍や石柱を消し去りながら、フエイトに向かって進む。

そしてついに、フエイトのもとへとついた。

「　えいつ」

ガラスが割れるような音がした。明日菜がハマノツルギでフエイトの魔法障壁を破ったのだ。

フエイトは明日菜が背後にいることにすら、気がついてないようだ。まだ下を向いている。表情はよめない。

「ハハハッ　フ　」

「うりゃっ」

明日菜はおもいきり、フエイトの首筋を後ろから殴った。

「ファブツ！？…あ……が…？」

そしてその結果、フエイトは少し奇声を発した後に気絶して倒れた。

暴走は止まったのだ。

「あっ ありがとうございます！ アスナさん！」

「へっへっん ぶいっ！」

「すげーなー…馬鹿力…！」

「コラッ！ 千雨ちゃん、しっかり聞こえてるわよっ」

「うげっ！ こ、この距離でかよ！？」

安心したのか、3人はワイワイと話す。しかしのどかは倒れたフ
ェイトに思いを馳せるのだった。

フェイト、さん…

気絶して倒れたフェイトの頬は濡れていた。笑いながら、ずっと
泣き続けていたのだろう。

もしかしたら彼は それを悟られないように、下を向いていたの
かも知れない。

成分 1 1 : 真実ノ声 (前書き)

注意

・この話は9話と10話の視点別物語となっています。

成分11：真実ノ声

十十11十十

「フェイトさんを……フェイトさんを助けてあげましょう!! き協力してあげましょうっ!!」

果たして、ヒトとはこんなにも簡単に協力してくれるものなんだろうか。

何か裏があるんじゃないか……まあ、僕はたとえ裏があったとしても、利用させてもらっけどね。

ネギ君と宮崎のどかが話し合っている。きっと僕についてだろう。

どうやら話し終えたらしい。もう話しかけてもいいかな。

「どうして僕なんかを……」

「……? フェイトさんの目的は、私達と関わることじゃないんですかー……?」

確かにそうだった。このまま順調に事が進めば、僕の願いは叶う。だが疑ってかかるのに 最悪の状況を想定するコトにこしたことはない。

それにもしそついったコトがあるのなら、把握しておいたほうがいい。

「僕は君達を殺そうとしたんだろう? そんな輩やかいのいうことを、君

は聞き入れるのかい？」

「フェイトさんは過去の記憶がないんですから、昔のコトは関係ないですよ」

ふうん　まあ、口ではどうとでも言える。所詮ヒトなんてそんなものだ。少なからず僕の経験からいうと、そんなものだった……？　経験？

「今のフェイトさんは、現在いまを生きているんですから」

天使のような微笑み　思わず見とれてしまった

ああ、そうか。彼女は本当に　僕を信じている

誰かに信じてもらえるなんて、考えもしなかった。たしかに他人からの信頼は欲していた。でもどこかでわかっていた。

「誰も僕を信じはしない」

でも彼女は、今僕を信じている。そして僕はそんな彼女を疑った……
それならば、もうやめよう

いや、やめるべきなんだ。こんなに美しい笑顔を浮かべる人と関わるコトは、きっと僕には許されない。

「…そうか。　そうだね。　そうかもしれない」

自己犠牲なんて偽善は好きじゃないけど、しょうがない。記憶探しは、また別の方法で行おう。

「でも、そんな簡単に……そんなふうには、簡単に決めていいのかい？ 僕はこんなにも、簡単に君を屠^{ほぶ}ることができるのに」

命の危機が迫れば、彼女だって逃げ出すだろう。なにより大事な仲間の危機に、ネギ君が黙っているはずがないしね。

「……『アベアット』」

「そんなコトをしてどうするんだ？ まあ、あんなものがあつたところでは、あまり意味はないだろうけど」

「誰かと話すときに、心を覗くなんてことは ダメですから」

真つ直ぐすぎる性格と心と眼差し……やはり僕みたいな輩^{やから}とは無関係でいてほしい。

「素直で優しい、直心^{ちたしん}の持ち主 か。しかし敵にたいしてそんなコトをするなんて、ただの愚直なお人よしだね」

「フェイトさんは敵じゃないですっ」

「僕がいうのもただだけど、ヒトの性分……性格は、記憶などがあつてもなくても変わらないんだよ。やはり君と僕は敵だ。この事実もまた……変わりはない」

だから、僕を信じないでくれ。

「そ、そんなこと、ないです」

「……？ 宮崎のどか。僕の言っているコトの意味はわかっているよね？」 「わかっています。わかっている……つもりです」

何をわかっている？

「フツ……死にたいのかい？ もしそうなら、君の要望に答えてあげ

るけど」

「ち、違いますっ。 フェイトさんが嘘をついているって、わかっているつもり…です」

「嘘？ 僕は嘘なんか」

「いいえ」

何故僕の正面で止まるんだい？ そして今、何を否定した？

「それも嘘、ですね…」

「……！」

否定されたのは、僕の言葉か

…見破られているんだね。

精一杯ついた嘘が。

君達のためについた嘘なのに。

見破られてはいけなかった嘘なのに。

「私はフェイトさんに協力します。 迷惑だなんて思ってません」

……だ、だからもう、嘘つかないで下さいっ」

「フン。 僕は嘘なんか……あれは本当に」

温かい 気付いたら彼女が僕に抱き着いていた。

「……………！」

身長差があつて少し態勢が辛い…けど。

「アーティファクトがなくなってもわかります。それが嘘だって。だってフェイトさん、とつてもいい人なんですからー…」

ヒトとは計り知れない。僕にはとても理解できない存在だ。でも温かい。

これはナミダ…？

「……………」

『……………ありがとう。あなたに出会えてよかった…』

「……………」

聞こえなかったみたいだね。まあ、聞こえないように言ったんだから当たり前だ。本音とは、ときに不要なものだからね。

「違うと言ったんだよ……………僕はいい人なんかじゃない。ただの道具だ」

それに僕には君と抱擁する資格なんてない。だから、もう離れてくれないかい…

道具？ 一体誰の？

「フフフ、フハハハハハ」

多少疑問も残るけど、ネギ君達に会いにきてよかった。愉快ない思い出ができた。

「フェイト…さん？」

思えば僕に思い出なんてあったんだろうか？
いや、なくてもいい。
新しい記憶を作っていくのも、案外いいのかもしれない。

「フハハハハ！」

ん？

石化魔法？

もしかして僕がコレを　　？

まあ、いいか。

ネギ君達なら、これくらい止められるだろう。僕を殺すなりどうにかして。

それもまた悪くない。元々、あの時に死んでいた運命なのだから。

あの時？　　僕は死ぬはず…だった？

「ハハハハハハ！」

ナミダはどうやって止めるのだろう。

そもそも、僕はなんで泣いているんだ？

一体誰のために？

一体何のために？

それとも僕がコワレているのか？

「ハハハツ　フ　」

そういえば笑いも止まらないね。

ああ、僕はあの人のようには笑えない。

笑うのに必要なのは顔の筋肉か？

「うりゃっ」

…鍛えれば笑えるのかな？

「ファブツ！？…あ……………が…？」

殴られた？

~~~~~  
~~~~~

「…ん……………」

ベットの上 「ここはどこだろう。またあの廃都…ではないね。

「……………」

「…ッ あ おー！？」

「わっ！…い…だ」

なにか聞こえる…高い、女性の声？

「あっ き、気付きましたか…？」

宮崎、のどか？

成分12：新夕ナ生活

十十12十十

「あっ き、気付きましたかー…？」
「……！？」

宮崎のどか？　ここはネギ君達の拠点？　僕は助けられた…
…いや、自惚れるな。腐ってはいないが、腐っても僕は敵。そんな
ことをするはずがない。だとしたら捕まった？　まあ、そう考える
のが妥当だろう

フェイトは目覚めたばかりの頭を高速回転させて、一つの答えを
弾き出した。

《逃走せよ》

その答えを実行すべく、フェイトはガバツと体を　起こせなか
った。

「……。」

起き上がる途中の微妙な体勢で静止する。

「だ、大丈夫ですかっ？」
「……ッ」

のどかの問いに、フェイトは答えることができない。
声がでないのだ。
鯉のようにパクパクと口だけが動く。

「あの、あまり無理しないで下さいねー……。アスナさんは……強、
かったので」

日本語として違和感を感じる文をのどかは話した。しばらくして、
何故彼女がそんな話し方をしたのか、フェイトは気付いた。

フェイトから見て横に鏡がある。その鏡に映った自分の姿を見て、
彼は絶句した。

首が真っ青 いや、青紫に変色していたのだ。ヨウ素液をデン
ブンにたらしめても、こんな濃い色はでないだろう。

彼は首を襲う激痛故に、起き上がれなかった。

彼は首とともに冒されたであろう器官や喉故に、話せなかった。
優しい彼女は他人を酷く言えない故に、変な日本語を話した。

つまり、この首のせいだ…

フェイトはまだ少ない記憶をさかのぼる。

『うりゃっ』

『ファブツ！？…あ………が…？』

あ那时的…神楽坂明日菜だったのか……

フェイトは「はあ…」とため息をついた。しかし実際は、掠れた吐息が出ただけである。

「……でも、よかったです。まだ30分もたつてないのに、そこまですぐに元気になるももらえて。やっぱりフェイトさんはスゴイですねー」
「……?」

「元気になるももらえて」……?」

フェイトはのどかの言葉に疑問を感じる。敵が元気になる不利になるだけじゃないのか、と。

…何はともあれ逃げよう。これくらいの痛さなら、意識さえすれば我慢できる。

フェイトはまた脱走しようと、今度は比較的ゆっくり体を起こす。すると、

「……?」

ドアが軋んだ。

「建て付けが悪いんでしょうかー……?」
というよりはドアが、

「わーっ!?!」

壊れた。

「うわっ」

「おう!?!」

「あ、やば……」

いや、より正確にいうなら壊された。

そして壊した犯人　和美、ハルナ、明日菜　が転がりながら
部屋に入ってきた。

それは誰が見てもわかる、失敗した盗み聞きの末路だ。

「ハ、ハルナ?!?!」

「アラおよびじゃない?　そう!　んじゃ!」

ハルナは挨拶するようにのどかに向かって右手を上げ、その後、
朝倉と明日菜を引きずりながら部屋を出ようとする。

「あ、ま、まま待って!」

「……」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「うわー。ほんつとアスナは容赦ないね」

「さすが麻帆良の馬鹿力!　ガンコちゃんッ」

和美とハルナはフェイトの首を見て、「冗談まじりに明日菜を責め

る。ハルナにいたっては、某有名な怪獣の名前を出していた。

「うっっ…うっつるさい！ てかそんなあだ名勝手に作らないでよ  
っ」

明日菜は反論するように声を上げた。そして律儀にあだ名を訂正する。

「きつとフェイトさんならすぐ治りますよ。 あと、お茶入りしましたので…よかったですらどうぞー」

のどかはフェイトの前にゆっくりとお茶を置いた。なにやら毒々しい色をしているそのお茶は、魔法世界で買ったものなのだろう。

「……。」

そしてみんなに見られている本人は、あまりいい気分ではなさそうだ。

彼らは（先程までフェイトが寝ていた）ベットに座っていた。

のどかは話せないフェイトとの気まずさが辛かったのか 盗み聞きをしていた3人を招き入れたのだった。

そして、フェイトは4人から自分が倒れた後のことを聞いた。どうやら、のどかの一存でフェイトは助けられたらしい。

（ハルナいわく、『あんなにのどかが積極的だなんて知らなかったよー』）

気がすむまでネギ達と一緒にいいそうだ。

以上のことを経て、彼らは今にいたる。

「でも、私だつて…その…：ちょっとは大丈夫だつたかなあ、とか思つてたわよ？」

「あゝあゝ。素直じゃないなあ、アスナっちは」

そっぽを向いてぼそぼそ喋る明日菜を、和美が笑いながら睨はし立てる。

「だつ、だからあ！ …悪かつた、わね…」

明日菜はそついつて、横目でチラツとフェイトを見た。

「………」

そのフェイトは、喉をさすっていた。それを見た明日菜の顔に、ありありと青筋が立つ。

「ええ、ええ！ どうせあなたの声が出ないのは私のせいですよ！」

「………？」

「でもだからつて、そんなふうに見せつけなくてもいいじゃない！」

「………??？」

フェイトは否定の意味をこめて軽く首をふる。

「これだから…ガキは」

しかし明日菜は、そんなフェイトの一切を無視した。そして右手を光らせる。

咸卦法…危な

フェイトが幾重にも魔法障壁を展開させようとしたときには、もう遅かった。

「これだからガキは嫌いだって………いつてるでしょー!」

明日菜の障壁貫通パンチが炸裂する。

「 - - % “ ……!」

この理不尽な攻撃をまともに受けたフェイトは、もの凄い勢いでベットにたたき付けられた。「くあwse drftgyふじこーp」  
のような、声にならない声がある。

ベットのパイプが軋む音が、狭い部屋に響く。

「あつ…う……し、知らないっ!」

加害者である明日菜は顔を赤くして、ドアのない部屋を飛び出して行った。

「あっちゃー。アスナったら…」

ハルナがため息まじりに呟く。

こうして、彼の新たな生活は幕を開けた。

### 成分13：女子達ノ問題

十十13十十

「じゃ、私はこれでおさらばするとしますか」

「私も失礼しますー 早く治るといいですねー」

「お、じゃあ私も。 治ったらこのパル様と語ろうね!」

一通り話し終えた和美、のどか、ハルナは各自行くべき場所へ帰って行った。

「.....」

フェイトは無言で視線を送るだけだ。彼女達が話しているときも、終始彼はこんな態度だった。

「あつ、そうそう」

突然、和美が思い出したように（というには芝居がかっていたが）フェイトに近寄る。

「話せるようになったら私に連絡してね 君に聞きたいコトは山ほどあるからさ」

和美はそう言って去って行った。

全員の足音が聞こえなくなった頃、フェイトはポフッ、とベットに座った。



「ふう……全員いった、か」

彼は疲れたように独り言を“いった”。

そう、フェイトはもう話せるのだ。

明日菜に殴られて少しした時点で、色は治っていないものの、すでに喉自体は治っていた。彼の驚異的な回復力の賜物である。

しかし、《怪我のせい》なら他人と話さなくてもいいと考えた彼は、まだ話せないという設定で通すことにした。

「まったく。無用心で不用意で危機感なんて微塵もない……優しいといえる人達だ」

言いながらフェイトは嘲笑とも苦笑とも似た笑いをする。

そしてふと、部屋を見回した。

「…この部屋が僕に与えられたスペースか」

思えば、彼はまだこの部屋をじっくり見てはいなかった。ある物は、

- ・今座っているベット
- ・壁掛け式の丸時計
- ・長い鏡
- ・小さな窓
- ・壊れたドアの残骸だ。

「……さっぱりしているね」

フェイトは顔に似合わずポジティブ発言を試みる。部屋には、

じつくり見るほど物がなかった。

おそらくこの部屋は元々倉庫か何かだったのだろう。異様に積もった埃や、少ない調度品の古さがそれを物語っている。

「とりあえず、片付けようかな……」

フェイトはため息と共にそう呟いて、立ち上がる。

「足音？」

立ち上がるのとはほぼ同時に、誰かが走っているのか盛大な足音がした。さらにその足音は、フェイトがいる部屋に近付いてくる。

「またさっきの人達、か？」

フェイトは首を傾げた。結果的にその予想は半分当たり、半分はずれることとなる。

「あんたってヤツは！」

その足音の主 やってきたのは激昂した明日菜だったのだ。

神楽坂明日菜？ 何故ここに……

フェイトなどお構いなしに、明日菜はずかずかと部屋に入り込む。そしてフェイトの前まできて、彼の胸倉を掴んで持ち上げた。

「ちょ、ちょっと待ちなさいってば！ えと 私？」

すると明日菜が《もう一人》あらわれた。

「アレ フェイト？ な、なんでここにいるのよ!？」

後からきた明日菜は、フェイトを不審者を見るような目で見つめた。フェイトはそうゆう目で見られるのには、哀しいことにも慣れている。なので、相変わらず胸倉を掴まれたまま慥然としていた。

「…まさか、これあんたのせいなの？」

「……。」

「そうに決まってるでしょ！ やっぱ私が本物よ。私コイツみたいに馬鹿じゃないもの」

「なにいつてんのよ、自分のコトは棚に上げちゃって この馬鹿っ」「な、なななんですって!」

いつのまにか、二人の明日菜は言い争いを始めていた。ちなみにフェイトは掴まれたままだ。しかし途中で武器として使用されたのか、投げ飛ばされ、ひじを打って床に落ちた。なんとも使えない武器である。

やかましい…

フェイトがこの無意味な争いに嫌気がさしてきた頃、彼の足元に泥のような 例えるなら《影の水溜まり》が出てきた。

ゲイト  
転位魔法？

そして転位してきたのは

「ばーやの相手をしてもらおうか。若造」

闇の福音、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだった。

エヴァンジェリンはフェイトの両足をガッチリ掴み、転位させるつもりなのか影に引き込もうとする。

「エヴァちゃん！？ どうしてここに…」

「ダメよ！ コイツは私が…」

二人の明日菜はエヴァンジェリンにフェイトを持って行かれまいと、とりあえず1人1本腕を掴んだ。

「…ん？ 何があった？ うるさいヤツが二匹もいるじゃないか」

「“匹”とかいわないでよっ」

「とにかくコイツは渡せないんだから！」

またややこしい      この金髪の方は誰なんだろう

フェイトは状況を把握しようとする。だが状況を改善するつもりはないらしい。

「フェイト殿？」

今度は楓がフェイトの元を尋ねてきた。何やら、手に大工道具等を大量に持っている。十三日の金曜日に、人を殺しそうなものまで持っていた。

「ふむ      そういえば拙者とは、はじめまして      」

そんな楓の言葉は途中で止まった。

楓の目には、女の子に手足を握られ、引っ張られているフェイトが映る。

「あー」

笑顔の形に開いた口が、そのまま楓の顔に張り付く。

「…お邪魔した、ようでござるな。では拙者はこれにて」

「ちよ、ちよつと待って！」

「楓ちゃんなんか勘違いしてない!？」

「……。」

「ほら、今のうちに来い。ぼーやには時間がないんだ」

「あ、エヴァちゃん抜け駆けはするいわよっ」

どうやらフェイトには、やるべきコトが多々あるようだ。

「…とにかく、離してくれないかい」

しょうがないので、フェイトは話すことにした。彼の話せないという設定も、今は不便なだけだった。

しかし話したことによって、明日菜が《ピクッ》と反応した。

「あんだ、喋れんの？」

「ふん。なのにわ・ざ・と喋れないふりをしてたってわけね」

「…それは誤解」

「問答！」

「無用！」

「「必殺・障壁貫通キック!」」

「だから いぶっ」

体を固定されたまま、フェイトは二人の明日菜に顔を足蹴にされる。腕はフェイトを掴んでいるから使えない…故に足だったのだろ

う。二人は喧嘩しているわりに、みょうにチームワークがよかった。

「…とにかく、何があったのかそれぞれ話してほしいんだけど」

フェイトはそう言うコトだけで、精一杯だった。

## 成分14：姫御子 明日菜

十十14十十

「私はこのかと刹那さんと買い出しに行つてて…帰つてきたら私がもう一人いたのよ。そしたらもう一人の私がいきなり走りだして、驚いたけど とにかく追い掛けたの。んで、あんたの所に行き着いたわけ。 わかつた？」

「私あんたを殴つて、部屋を飛び出してつたでしょ？ 暇になつちやつたからぶらぶら歩いてたのよ。それで、しばらくしたら私がもう一人いて こんなあんたの仕業に違いないと思つて、ここにきたのよ」

「私はお前を取りにきただけだ。あの筋肉馬鹿が大会に……ぼーやと戦うとか言いはじめてな。ぼーやの今の強さじゃたががしれていゝるから、急遽修行をすることにした。そしたら今はお前がいていゝうじゃないか。だったらぼーやと戦つてもらえれば手っ取り早い。実践は何にも勝り、強くなれるからな」

「んー？ 拙者はその三人程たいした理由じゃないでござるよ。フェイト殿に、壊れたデッキを直してもらおうと思つたんでござる。あれはフェイト殿の仕業だと聞いたでござる。あと、好奇心からフェイト殿を一目見ようと、というか会おうと思つたんでござる」

明日菜（×2）、エヴァンジェリン、楓はそう言った。

四人ともちゃんとした“理由”を持ったうえでここにいらっしゃるらしい。

「とりあえず、放してくれないかい？」

フェイトは呆れつつそう言った。

今彼は

・頭を楓

・右腕を明日菜

・左腕を明日菜”

・両足をエヴァンジェリン

…に掴まれている。しかも楓以外は止血するほど、もしくは内出血するほど強く握っている。

楓は楓で、フェイトが少しでも動くとも頭に指が刺さるであろう方法で、頭を掴んでいた。

「ダメに決まってるでしょ！ 逃がさないんだからっ」

「放したらこいつらがお前を連れていくだろうっ？」

「とにかく私（達）をどうにかしなさいよ」

「拙者はノリでござる〜」

「…ならあなたは放して下さいよ」

「ニンニン」

とにかくフェイトは問題を解決しないと（一人ノリの人が出たが）解放してもらえないらしい。

だっ たららうるさい神楽坂明日菜からにしよう…

優先順位を決めたフェイトは、さっそく問題解決に取り掛かる。

「神楽」



しかしフェイトの言葉が止まった。

そういえば、ネギ君達をどう呼ぼうか…苗字にさん付けでいいかな？

フェイトはネギ達の“呼び方”を決めていなかったのだ。

今まではフルネームで呼び捨てにしていたが、世話になるのだから改めようと思ったのだろう。

彼も一応、それくらいの礼儀はわきまえていた。

「神楽坂さんは、たぶん片方が僕の従者の栞君だと思う」

「…随分と曖昧なもんね」

「記憶がないからね。目覚めたときに従者から聞いた話しか、今は頼れないんだ」

「ふーん。で、その栞って子にどうやって偽物の私は戻るの？」

「…」

「黙らないでよっ」

「まさか わかんないの？」

「言い訳になるけど、さっき言った通り僕には記憶がな。ぶっ…」

フェイトはまた明日菜に足蹴にされた。

さらに、動いたために楓の指が頭に刺さり、頭から出血する。

「栞君は能力まではコピーできないらしいから、魔法無効化能力があるほうが本物だと思う」

口や頭からだらだら血を流しながらも、フェイトは説明した。

「ほほう。つまり魔法障壁を破れるほうが本物というわけか」

エヴァンジェリンがまとめるように説明した。一見的確なように聞こえるが、この説明では誰かの魔法障壁を破らなければならぬ、ということになる。

「あー…さっきは一緒に蹴ったからわからなかったのね」

「じゃあ今回は一人ずつ蹴ろっか」

「え…」

「ではまず私から… とうっ！」

「あぐっ!?!」

そしてフェイトは腹を思いきり蹴られた。と、同時にキャラに似合わない奇声を発する。障壁は破られていた。

「クツクツ」

それを見たエヴァンジェリンは笑っている。フェイトはエヴァンジェリンを、じと っとした目で睨んだ。その湿度の高い目線に、エヴァンジェリンは首をすくめる。

「……今蹴った神楽坂さんが本物だね」

フェイトはそう言って自分の腹を見る。

治ったばかりの肋骨がまた……

彼には骨折の痛みよりも、呆れのような感情が先にきた。

「……ちょ、ちょっと待ってよ！ じゃあ私は 偽物なの？」

フェイトが顔をしかめていると、偽物といわれた明日菜　　菜が  
問い掛けてくる。

「必然的にそういうコトになるね」

フェイトは面倒臭そうに答えた。彼にとってこの件はもう決着が  
ついたので、どうでもよいのだ。

「記憶も感情もちゃんとあるのにな？」

「アーティファクトと魔法の力でそうなっているだけらしいから  
まあ、じきに君も元に戻るだろう」

それでもしつこく聞いてくる菜に、フェイトは一応真面目を装っ  
て答えた。だが、それは他人から見ても面倒臭さが伝わってくる言  
動だった。

「でも…わたしはっ　　」

「そんなことより！　…神楽坂明日菜、貴様よくもこれからぼーや  
の相手をするコイツを傷だらけにしてくれたな！」

菜の言葉を故意に遮るように、エヴァンジェリンが軽く叫んだ。

「　　え？」

「今すぐ木乃香を呼んでこい！　ぼーやには時間がないと、さっき  
から言っているだろう！」

「あつ　　うん！　わかつたっ　　」

菜は突然のことで驚いたが、エヴァンジェリンの命令通り、木乃  
香を探しに部屋を走って飛び出していった。

栞が走って行くのを見届けたエヴァンジェリンは、フェイトを見定めるように眺める。

「…フン」

そして鼻で笑った。

「まったく お前もぼーやに負けず劣らずガキだな」

この言葉の意味が、フェイトはイマイチよくわからなかった。

「それはどういう意味だい？」

だから素直に聞いた。

「私がいいたいコトはだな、“ヒトの心”を少しでも理解しろ。理解できなくとも、わかるうと努力くらいはしろ ということだ。わかったか」

フェイトは、まだわからなかったので首を捻った。（楓の指がまた刺さる）

「何故今このタイミングでこの話をしたのかすら、わかっていないよっだな」

「ああ。僕には皆目わからないね」

イライラしてきたエヴァンジェリンを見兼ねた楓が、フェイトに助け船を出す。

「今走つて行った明日菜殿の口でござるよ」

「あの偽物だった神楽坂さん？　あと、もう放してほしいんだけど」

「放すのは嫌でござる〜」

「あなたのその手が一番危険」

「何か言つたでござるかな？」

「いや、なんでも」

「貴様ら、話しがズレているぞ」

何故か途中からコント風になった会話を、エヴァンジェリンが軌道修正する。

「あの偽アスナはな、自分が本物だと思っているんだよ。それがたとえ魔法での事象だったとしても、だ」

エヴァンジェリンは栞の弁解をするように、語り始めた。

「だがお前はそれを否定した……自身の存在を否定されたんだ、あんなふうに反論したくもなるだろう。さつきも、私の言葉に走つていった」

エヴァンジェリンは哀れむような表情になり、フツと微笑した。

「ここに　居ずらかったんだろっつな」

成分15：姫卜剣士

十十15十十

「ここに 居ずらかったんだろうな」  
「走って行ったのは、あなたがそう命令したからじゃ」

フェイトは格好よくキメたエヴァンジェリンの揚げ足を取る。

「…これだから乙女心を知らん若造、はっ！」  
「・・・ツ！！」

その結果、折れている肋骨を殴られた。骨折は見抜かれていたのだろう。

「…さつきから思っていたが、お前は何故避けない？ 瞬動でも幻影でも使えばいいだろうに」

エヴァンジェリンは自ら攻撃してきたくせにそう言った。

「……生憎覚えてないんでね」  
「ハッ！ 何を言っている。お前は覚えているだろう？」

エヴァンジェリンの言葉に、フェイトは（無表情だが）キョトンとする。漫画ならデフォルメされるような感じだ。

「お前は私が魔法障壁と言ったとき、特に疑問に思っていないよう

だったじゃないか。今さっさき瞬動、幻影と言ったときもそうだ」

「え」

「つまり、お前は“理解している”魔法障壁が、瞬動が、幻影が何か知っている。ほら、覚えているじゃないか」

「そう、だね」

フェイトは自分でも気付かぬうちに、魔法について思い出ししていたらしい。こういうことは、案外他人のほうがよく気付くものなのかもしれない。

そういえば魔法障壁を展開したし、しようともした。瞬動だつて使った。アレが石化魔法だとわかった。転位魔法も知っていた

……

「僕は…覚えていたんだ」

一瞬フェイトの口角が上がるのを、エヴァンジェリンは見たような気がした。

笑ったのか？ あの若造が…

「おっ」

「……ん？」

ぼーっとしていたエヴァンジェリンは、楓が発した言葉で我にかえる。

「便利だね」

いつのまにか、フェイトは楓とエヴァンジェリンから1mほど離

れたところに立っていた。たぶん二人からの避難も兼ねているのだろつ。

エヴァンジェリンは見ていなかったが、魔法を使ったのだと予想はつく。

「やはり使えるじゃないか。まあ、だからこそぼーやと戦ってもらつんだがな。長瀬楓、コイツは先に借りるぞ」

「あい、わかつた。そちらを優先したほうが良さそうでござるしな」

わかつてはいたけど、僕の許可はとらないんだね

会話の流れで、次は戦うことが決定したフェイトはため息をつく。すると、しゃがみ込んでいる明日菜が目に入った。なにやら様子がおかしい。

「神楽坂さん？」

「……あ、ああ何？　なんか用？」

少し慌てた、ぶつきらぼうな返事がくる。

「いや、とくに用はないけど。大丈夫かい？」

「？　大丈夫よ？」

「そう？　顔色がよくないみたいだったから……」

フェイトはしゃがみ、明日菜の顔を覗き込むように見た。

な、なな何よこのガキ　心配してくれてんの！？　ホント調子狂うわね、もう！　てか顔近いっ



「だ、大丈夫よっ」

そう言うと、明日菜はプイツと後ろを向く。何か悩んでいるのか、考えごとを始めたようだ。

「ふうん……」

とりあえず、フェイトはそれ以上詮索することを止めた。そして自分も考えごとを始める。

あの金髪の人に言われたように、人と関わるには人を気にかけよう

それは彼の小さな決意、というか《生活目標》になった。

でもそれも存外難しい。彼女のことなら意識せずとも気にかけられるのに……

そこまでいって考えが止まる。しかし、しばらくしてまた高速で頭が動き始めた。

彼女って宮崎のどか…何故僕が気にかける？ そんな必要はないはずなのに。彼女のアーティファクトが危険だから？ これも失った記憶の影響なのか？

その頃、足音と叫び声がフェイトの部屋に近付いてきていた。

『お、お嬢様！ いけません、奴は危険』

『もう！ せつちゃんったら何いうとるん？ アスナも大丈夫やゆーてたやないか』

『し、しかし』

「なにやら賑やかでござるな」

「このか…と刹那さん？」

「ふん。うるさいガキが」

そして、渴いた木を叩いたような軽い音が、室内に響いた。  
木乃香が扉のない入口（の側面）を叩いていたのだ。

「お待ちどーさん。今来たえ」

さらに、その後ろから刹那が現れる。

「お嬢様っ」

刹那は部屋に入ってそうそう、フェイトをギロツと睨み、木乃香を守るように二人の間に立った。

「エヴァちゃん？ 連れてきたわよ」

最後に偽明日菜・栞が出てきた。

「うむ。ご苦労だったな。早速で悪いがコイツを治療してほしい」

「わかつとるよ。そのためにウチは来たんやからな」

エヴァンジェリンにした返事から察するに、木乃香は治療に乗り気なようだ。

「頭・口内から出血、右手首と両足首に内出血、首にアザがあり、気管などを損傷している可能性がある。きわめつけには、肋骨が数

本折れている」

「うひゃー…よくそれで立ってられるなあ。はよ治さなアカンやん」

木乃香はエヴァンジェリンから怪我の程度を聞くと、フェイトのほうへ向かって軽く走る。

あんなたつくさんケガしとって……まるで宝の山や

木乃香は嬉々として走っていた。

すると刹那が木乃香の手を掴んだ。

「……？　せつちゃんどうしたん？」

「お嬢様、あいつは敵です。以前お嬢様があいつに何をされたか、覚えていらつしやらないのですか？」

刹那は真剣な表情でそう言った。以前とは京都でのことを言っているのだろつ。

「…覚えとるよ。でもせつちゃん、あの子は覚えとらへんのや。覚えのないコトを責めるんは、よーないよ」

「……！」

「それにピンチになったら、またせつちゃんが助けてくれるやろつ」

木乃香は屈託のない笑顔を刹那に向けた。刹那は思わず顔を赤らめる。

なっ、なんて寛大なお心　それでいて、素直でお優しい眼差し　しかも私のことを、こんなにも信頼して下さっているなんて…私が意見するまでもなかった…！

刹那は木乃香から後光がさすのが見える気がした。それはもはや（刹那から見て）観音菩薩のようだった。

「…せつちゃん？ 何しとるん？」

「あ、いえ…あの　そ、そういうことでしたら　わかりました」

「おー、ありがとうな！　さくでフェイト君　」

木乃香がフェイトのほうを向くと、フェイトは一人で考えごとをしているようだった。

宮崎のどかは要注意人物だったに違いない。そうでなければ何故僕が

「…フェイト君？」

木乃香の声はフェイトに届いていない。

『だってフェイトさん、とってもいい人なんですからー…』

のどかの声を思い出した瞬間、フェイトの顔がボツと赤くなった。

「フェイト君っ!？」

「あ　」

ようやくフェイトは木乃香の存在に気付いたようだ。

「熱まであるん!？　顔が真っ赤やつ」

「い…いや　大丈夫。　ホントは怪我だっただけのことないんだよ」

フェイトは慌てて言い繕った。

そして思いついたようにハツとして、コホンと一つ咳をした。

「そっいえば……改めまして。僕の名前はフェイト・アーウェルンクス。あなたの名前は？」

## 成分16：癒シナス魔法

十十16十十

「改めまして。僕の名前はフェイト・アーウェルンクス。あなたの名前は？」

突然の出来事に、その場にいた全員がポカンと静止する。だが尋ねられた張本人、木乃香の再起動は早かった。

「あ、ウチの名前は近衛木乃香。治癒術師を目指してるんや。よろしゅうな」

「よろしく、近衛さん」

フェイトはさん付けだけで敬語こそ使わなかったが、彼なりに丁寧に挨拶をした。

「…あなたは？」

続いて刹那に問い掛ける。

刹那はフェイトを見据え黙っていたが、木乃香の「む〜」という声と視線に気付き自己紹介を始めた。

「私は 桜咲刹那。このかお嬢様の護衛を務めている。格闘が主で、未熟ながら京都神鳴流の使い手だ」

「その流派はどこかで聞いたことがあるような、ないような　　ま  
あ、これからよろしく」

やはりフェイトへの警戒を未だにといっていないのか、刹那の返事はぶっきらぼうだ。よろしくと言われても目を逸らし、ピイツと横を向いてしまった。

「拙者は長瀬楓と申す。忍術、体術等を主に使うでござるよ」

「私か？ 私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。闇の福音：吸血鬼の真祖だ。戦闘スタイルは特にないな。基本的になんでもする。まあ、私は本体ではないがな」

なんとなく、その場のながれで楓とエヴァンジェリンも軽く自己紹介をした。

「みんなフェイト君への自己紹介も済んだことやしー……さあ、治すえ」

言いながら木乃香は瞳を少女漫画のように輝かせ、フェイトに歩みよる。その気迫に、思わずフェイトはたじろいだ。

「いや だから僕は」  
「そんな遠慮せんといてな。ウチにとっても修行になるんやから。」  
『アデアット』

フェイトは魔法関係はほぼ覚えているらしい。眉を少し寄せて、アーティファクトを眩しそうに眺める。

「『東風ノ檜扇・南風ノ末廣』」  
「・・・！」

フェイトの体の周りが薄く光り、傷口がビキビキと音をたて始める。そしてみるみるうちに怪我が治っていった。さらに、怪我をする前よりも体に力が満ち溢れる。

「んー、まだおつきい怪我はキレイに治せへん…どんな怪我でも治せるように、頑張らなアカンな！」

木乃香はグツと腕に力を込めた。するとフェイトの顔が、それこそ熱があるように赤くなる。

そんなフェイトを見て、楓は苦笑する。

フェイト殿もあなると、人間味がでるでござるな

「近衛さん、ちょっと、魔力が、強、すぎる…」

フェイトはとぎれとぎれにそう言った。完全治癒呪文ではなかったが、それでもフェイトにとって木乃香の魔力は強力だったらしい。だがそれもそのはず…木乃香は魔力の量だけならば、千の呪文の男の三倍あるのだ。

故に力が満ち溢れ 彼の容量を超えた。

「へ？ あ、ごめんなっ」

木乃香が力を弱め、アベアットしたときにはもう手遅れで、フェイトは床に両手と立て膝を付きぐったりしていた。まさに「orz」のポーズである。



「 やってもうた」

木乃香があちゃー、と困ったように顔に手をあてる。

「フフ 大丈夫だ。むしろ有り難いくらいだよ」

しかしエヴァンジェリンは、熱っぽいフェイトを引きずりながら  
そう言った。

「せやなあ、迷惑やもんな つてえ？ 今ありがたいってゆーた  
ん?!」

「ああ。 さて、コイツは貰っていくぞ。じゃあな」

木乃香の問いにまともに答えることなく、エヴァンジェリンは  
引きずったフェイトごと（転位していった。

「あーん エヴァちゃん行ってもうた」

「お嬢様は力の制御も会得しなければならぬようですね。なにや  
ら今回はプラスに働いたようですが…」

フェイトがいなくなったせいか、幾分表情の緩んだ刹那は木乃香  
にそう言う。

「そやなっ！ …でもなんやっただんやろ？ ありがたいって」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

黒過ぎる影が、突然現れた。それは見る人が見れば、影を使った転移魔法だとすぐにわかるだろう。

エヴァンジェリンはダイオラマ魔法球の前に転位した。

魔法球の中では小さな人間が高速で動いている。修行中のネギ達だ。

「ほら、行くぞ」

そして一緒に転位してきたフェイトをパシパシと叩く。だがフェイトは相変わらず、ぐでぐんとうなだれていた。いや、のびていると言ったほうがいいかもしれない。

「まったく、情けない奴だ」

エヴァンジェリンは、言葉程にはきつくない表情でそう言った。

フンと鼻を鳴らしたエヴァンジェリンと、フェイトの足元が光る。

「…………お前には、期待しているんだがな……」

二人は魔法球の中に消えた。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

もうアイツは行っちゃったみたいね「やっとですわね。ふう  
一人になれる場所に行きたいですわ」そう一人　　って、え？  
何思ってるのよ私？

フェイトがエヴァンジェリンと転移して行った後、偽明日菜・栞  
は自分に自分でツツコミを入れた。

「とりあえずココを出て」それからどこかに、って何！？  
なんなのよコレ！？？

偽明日菜は、とりあえず自分の頭をポカポカと叩いてみる。

「アスナさん、どうかされましたか？」  
「なんで自分の頭なんか叩いとるん？」

そんな光景を見た刹那と木乃香は、偽明日菜にそう尋ねた。頭に  
汗マークが出ている感じで。

一瞬本物の明日菜が反応したが、すぐに偽明日菜に言ったことだ  
とわかったようだった。

「な、なんでもないわよっ」

偽明日菜は慌ててそう言う。

「そういえば、フェイト様が壊したデッキがありましたわね。  
あそこなら人目を引かずにいいかもしれません」よし、デッキに  
ってもう！ ホントわけわかんないわね！ ハッ！ もしかして  
コレもアイツのせいなの！？

「明日菜殿？」

楓までもが心配そうにそう言ってきた。  
すると偽明日菜はキツと顔を上げ、鋭い眼で楓を見る。

「楓ちゃん、私は大丈夫。でも行かなきゃいけないところがあったみたい」

「そう、でござるか」

その決心したような顔を見た楓は、心配することもないかと思いとくに追求はしなかった。

「じゃあねー！」

楓の心情など知らない偽明日菜は、勢いよく走っていった。

エヴァちゃんの話し聞いて心配してたけど…よかった。結構大丈夫そうじゃない。もう一人の私

そんな様子を見ていた本物の明日菜は、元気に走っていく偽明日菜を見て優しく笑っていたのだった。

## 成分17：魔法球

十十17十十

「ハツハツハ！ そんな拳じゃいくら殴っても無駄無駄無駄無駄無駄無駄ア！！」

「ぐっ！ さ、さすがリカードさんっ」

「ほなネギ、行くで！」

「わかった 小太郎君！」

<ダイオラマ魔法球内部>

「分かってはいるだろうが、お前にはこれからぼーやと戦ってもらう。ちなみに拒否権はない」

エヴァンジェリンはフェイトにそう言った。しかしフェイトはかろうじて立っているだけで、エヴァンジェリンの話しをしっかりと聞いているかすら怪しい。

「でも、僕はこんな状態なんだけど……」

どうやら話しを聞けていたらしいフェイトは、一応遠回しに拒否してみた。

「いつもより魔力が多いただけじゃないか。むしろお前にとってはプラスになると思うがな」

言つてエヴァンジェリンはククツと笑つた。先程言われたとおり、本当にフェイトには拒否権がないらしい。最近の扱いをみると、人権があるかすら怪しいものだ。

「だけど」

それでも不満げなフェイトに、エヴァンジェリンがとどめをさす。

「お前が華麗に勝ち、ぼーやに的確な助言の一つや二つしてやればどうだ？ あそこに居る女達から、ちよつとは信頼や感心…上手くいけば好意を得られるかもしれんぞ？」

エヴァンジェリンは言いながらあごでクイツと横をさす。そこには茶々丸、のどか、千雨がいた。

「……！」

フェイトは驚いたのか一瞬固まる。今まで周りを見る余裕がなかったので、ギャラリーの存在など知らなかったのだろう。

たしかに信頼などは僕がココにいるために必要だ。ネギ君の相手をするだけで手に入るのなら安いもの。僕自身、全く戦えない状態なわけではない

とりあえずフェイトはそう軽く考えて、座っている女の子に目をうつす。遠いからか、治癒呪文のせいかは分からないが、視界がぼ

やける。

あの人は誰だろう……耳……？

茶々丸を知らないフェイトには、彼女の存在が不思議でならなかった。顔の側面に付いている物が、特に気になる。

「まあ、お前がなんと言おうと、もう決まったことだ」

何故だか突然、エヴァンジェリンがニッと笑った。ハツとしたフェイトは茶々丸から目を離す。

この若造が他人を見つめるなんてな。まさか恋か？ ふふっ、それなら面白くなりそうなものだが……

エヴァンジェリンは見当違いな笑いをたたえたまま、ネギ達を呼びに行ったのかフツと消えた。

「模擬戦闘か…はたして、僕にできるのかな」

成分18：開始ノ鐘カ合図（前書き）

だいぶ更新が遅れてしまいました。  
すみません。



## 成分18：開始ノ鐘ヲ合図

十十18十十

「模擬戦闘か：はたして、僕にできるのかな」

エヴァンジェリンが消えた理由を察したフェイトは、小さなため息をつく。

そして横目でチラツとのどか達を見た。どうやら三人は、話しながら初心者魔法の練習をしているようだ。魔法の射手が数本放たれる。

「……………」

そんな和やかな風景を見て、フェイトはなんだか優しい気持ちになった。しかしながら微笑むことはできない。顔はいつもの無表情である。くわえて頭がぼーっとするし、体が暑い。

僕が宮崎のどかを気にかけるのは、彼女が“ネギ君の仲間”で“危険な読心術師”だからだ。つまりもとあつた記憶の影響。きつとそうだろう

フェイトはそうまとめた。いつになく長考が多い。

彼は何となく、これが無くした記憶の影響ではないと気付いている。だが他につけられる理由がなかった故に、この結論で無理矢理納得した。

気をとられ、立ち止まっではいけない。無駄な考えなどはない。僕は人形　自分勝手な考えで、状況を左右してはならない

フェイトは自分の考えに頷く。しかし、すぐにハツとした。

人形？　誰の？　状況…？

『僕はいい人なんかじゃない。ただの道具だ』

フェイトの脳裏に、暴走を起こしたときの自分の発言がうつる。同時に抱き着いてきたのどかも思い出したが、そちらは頭から振り払った。

「僕は誰かの道具で、人形だった。何か大きなコトをするための

」

フェイトは記憶を断片的、かつ無意識に思い出すことがあるようだ。

しかし「人形」や「道具」などは、ヒトに使用するのにあまりいい単語ではない。差別用語に近いものすら感じる。なのでフェイトは複雑な面持ちとなった。

うーむ、とフェイトがうなっていると、突然エヴァンジェリンが現れた。

「待たせたな。暑苦しいアイツがなかなかばーや達を開放しないから」

出てきて早々、エヴァンジェリンはぶつぶつと愚痴る。「暑苦しい」「鬱陶しい」「髭」という単語が、暴言とともに吐かれた。続いてネギ、小太郎が現れる。

「なっ…！ 相手ってコイツなんか？ どーゆうことや？！」  
「マ、マスター？！」

小太郎とネギはエヴァンジェリンに詳しい説明を求めた。エヴァンジェリンは暴言を吐くのを止めて、少し考え

「コイツが是非お前らと戦いたいというんでな。私が場所を用意してやったというわけだ。ちょうど修行になっていいだろ」

とっさに話しをでっちあげた。

「……僕はそんなこ。とっ！？」

抗議の声をあげたフェイトは、言い終わる前にエヴァンジェリンに足蹴にされた。

当然の如く吹っ飛ぶフェイト。こちらに来てからというものの、蹴られ殴られ散々な目に遭っている。

ホントに体温が高くなっているんだな…

対してエヴァンジェリンがフェイトを蹴った感想は、それだけだった。

そして何が何だか分かっていないネギと小太郎のために、エヴァンジェリンは大声で言う。

「たった今から戦闘を始める！ 殺す気でいかんと、お前らは死ぬ

ぞー!!」

この言葉で、フリーズしていた二人は動き出した。辛く激しい別荘での修行で、開始の合図で戦い始めるように、エヴァンジェリンから叩き込まれていたのだ。

「とにかくいこう、コタロー君……援護を頼む！ 近接戦闘で無理せず相手を!」

「ああ！ よーはアイツを倒せばええんやろ!」

二人は空中で受け身を取り、静止しているフェイトに向かっていった。

## 成分19：逆境無頼ノ賭ケ

十十19十十

「…どうやら始まったようですね」

「アイツが相手で、先生達は大丈夫なのか？」

「ネギせんせいなら大丈夫ですよー」

茶々丸・千雨・のどかは、ネギ達の模擬戦闘を観戦していた。だが動く速度が速過ぎて、ほとんどといっていい程見えない。にもかかわらず、のどかはキラキラした瞳で試合もとい“ネギ”を見ていた。

「そういえば、お前遺跡の調査はいいのかよ」

雑談でもするように、千雨は茶々丸に話し掛ける。だが、茶々丸もネギを見たままだ。ただ、こちらはしっかり動きが見えているらしい。

しかし、黒目がマツハで動いていて、恐ろしい。

「まだ出発まで時間があったので、こちらに来ました」

言いながらも、茶々丸はネギから目を離さない。黒目は動き続けている。そんな茶々丸の答えを聞いた千雨は、軽く笑った。

「お前は先生を見に来たのか。まったく、ロボ子のくせに……」

「な、なな何を言います千草さん」

「私の名前は千雨だ。誰だよ千草って。てか目、怖いぞ」

顔はそのままで焦る茶々丸を、千雨はしばらくいじっていた。

一方、こちらはネギ達。

「小太郎君、聞きたいことがあるんだ。時間は多分数秒しかもたない。イエスかノーで答えて」

小太郎がネギに答えようとすると、フェイトが向かってきた。無駄な動きが多いが、それが気にならない程速い瞬動だ。

「『逆巻け春の嵐、《彼》に風に加護を 風花旋風・風障壁！』」

フェイトの攻撃を阻む為、ネギが呪文を発動させる。それは詠唱部分を「我ら」から「彼」に無理矢理変えただけの、かなり強引な呪文だった。だが効果はあったようで、フェイトは巻き上がる風に閉じ込められる。

強引だけど……この魔法は敵を封じる為にも使えるのか。便利なのか、そうじゃないのか、いや……？

フェイトは素直に感心した。だが思考力が少々低下している。

「でもこれは……」

フェイトは目を閉じて、薙ぎ払うように勢いよく手を振る。すると衝撃波のようなものが出て、風を弾け飛ばした。いや 掻き消

した。木乃香の魔力もあり、軽い台風が一瞬発生する。

「簡単に破ることができるとりあえず、この僕は」

結果的に、フェイトが捕まっていた時間は僅か六秒。しかしネギにとってはそれで十分だったらしい。要件は全て小太郎に伝わっていた。

「んなもん決まっとる、イエスや！」

そして小太郎はネギの提案に賛成した。いつだって、ライバルは最大の理解者なのだ。

ネギと小太郎は一瞬顔を見合わせて、ニツと笑う。それは二人が久々に見せる、子供らしい純粋な笑みだった。

「ありがとう。この戦い、絶対勝とう！」

「おう！ あったりまえや！」

そして二人は、作戦を実行する。

ネギは遅延させていた呪文を開放した。

『開放 術式兵装「獄炎煉我」』

それを見たフェイトが石柱を出現させようとした。その時、ネギが大声で叫んだ。

「フェイト・アーウェルンクス！ この模擬戦闘で、僕と賭けないか？」

ネギのこの言葉で、フェイトは攻撃の手を止めた。出しかけの石

柱がズシンと地に落ちる。しかも運悪くそれはフェイトの足の上に落ちた。

普通なら骨折ものの怪我ができるだろうが、フェイトにはあまり影響がないようだった。

「……何を、だい？」

足を潰す石柱になどお構いなしに、フェイトはネギに尋ねる。

「もし僕が負けたら、君のいうことを一つ聞く。でも僕が勝ったら、君には僕のいうことを一つ聞いてもらう」

フェイトは黙り込み、しばし考えた。傍から見ると、ぼーっと突っ立っているように見える。さらに、未だに石柱が足を圧迫し続けていた。

あきらめた小太郎が攻撃しようと、手を振り上げた時、

「その賭け、受けよう」

フェイトは受け入れた。

足の上のいる石柱を破壊し、ネギを見つめてそう言ったのだった。

追い出されるかもしれないね

ふとそんな考えが頭をよぎる。

しかし、つけるよりほかない。ネギ達にもネギ達なりの考えがあるのだろうし、第一フェイトは自分が負けるなんて思ってたなかった。それに今回の命令は闘うことであつたので、闘えればそれでよかったのだ。

フェイトは揺れる視界が鬱陶しかったし、賭けたのに負けては立



場が危ういと考え、力を右手に集中させる。そしてそれを、圧碎した。もう多すぎる力は消えたのだ。

「……じゃあ、そろそろ再開しようか」

しっかりと地に足をつけ、不敵に口元を歪ませた。

## 成分20：猛攻撃トタダノ分身

十十20十十

「……じゃあ、そろそろ再開しようか」

「ああ」

「はよ来いや！」

フェイトはネギを攻めることにした。小太郎よりも、闇の魔法を使うネギのほうが危険だと判断したのだ。

だが小太郎も次々と後方から攻撃してくる。しかしフェイトは避けようともしない。

「なんや……なんやねん！ 俺は無視できるくらい弱いんか！！！」

「……………！！！」

気が付くと小太郎は、フェイトの真後ろにいた。

部分獣化？

手足の姿が変わった小太郎は、フェイトの頭に思い切り踵落としをした。

ネギと闘っていたフェイトは、その速い攻撃を避けることができず、不本意ながらも頭でダイレクトに受けとめる形になった。

「……………っ！！！」

「まだまだ行くで！！！」

頭を蹴落とされ落下するフェイト。そのフェイトを追い掛けるように落ちる小太郎。

そして追い付いた小太郎は、フェイトを蹴り上げた。さらに、殴る。

とどめに狗神を放った。

「どや。俺だつてネギのいない間、トーナメントを一人で勝ち残ってきたんや」

「そのわりには、威力が低いね…」

言葉とはうらはらに、フェイトは指先から血を滴らせていた。強がっているのか、怪我に気付いていないのかはわからないが、フェイトが言ったよりも威力があつたことは確かだ。

さらに、小太郎が仕掛けたと思われる攻撃のせいで、足が地面から動かない。

現状打開策が頭を駆け巡る。

「僕のことも忘れないでよね」

しまった。

遊びすぎた。

フェイトがそう思ったのも、つかの間のことだった。

「『雷華崩拳！！』」

「『狗族獣化！』」

ネギによる前後からの攻撃（+狗神）が、フェイトを襲う。

小太郎は完全獣化したただけだったが、名前を格好よく叫んでいた。

「く……!!」

ガラスが割れるような、気味のいい音がした。フェイトの障壁が、壊れる。

「まだや!」

「ああ! 『雷の暴風!』」

それでもネギと小太郎は攻撃の手を止めず、フェイトに襲い掛かる。

「『左腕解放、千磐破雷!』」

「『狗音爆碎拳!』」

とてつもない爆音が辺りに轟き、煙で何も見えなくなった。フェイトが羽織っていたローブが、ひらひらと宙を舞う。

だがネギと小太郎は油断せずに、耳を澄まして気配を探る。すると、飛んだ。

いつの間にか、二人は飛んでいた。

フライアウエー。

「やれやれ。君達には困ったものだよ」

「頭がいいのか悪いのか、わからないね」

宙を舞うネギ達の下には、上半身裸の二人のフェイトがいた。決して、変態ではない。

「フェイトの、分身?」

今さっき、ネギと小太郎はフェイトに投げ飛ばされたのだった。

なので今は流星（キラツ）のように飛んでいた。

二人からの強力な連続攻撃は、さすがのフェイトも回避せざるを得なかった。なので途中、受け身で攻撃箇所をずらし、扉を使用して逃げ、その後分身して二人を投げたのだ。もっとも、既に障壁は全て壊れていたのだが。

「コンビネーションはなかなかいいね。犬上小太郎の足止めはきく」  
「それにネギ君の力は凄まじい。遅延呪文もあるし、それを利用した強力な連続攻撃もできる」

「犬上小太郎が足止めしている間に、古代呪文でも遅延させればいい」

「けどまだ足りないね。決め手に欠けるだろう」

「二人と………いない」

フェイトがぺらぺらと話している間に、有り余る勢いでどこかに飛んでいったらしく、二人の姿は見えなかった。

**成分20：猛攻撃トタダノ分身（後書き）**

何故か携帯からここにアクセスできなくなってしまいました。  
これからは更新が遅れると思います。（今までも十分遅かったです  
が。）

## 成分21：飛バサレテ星間飛行

十十21十十

こちらは飛ばされた二人。フェイトより数十米離れた場所に着地していた。

巻きあがる土煙にせき込み、涙目になる二人。

「……つと。つかなんやねん、あの馬鹿力は」

「魔法で肉体強化してるのか。それとも元々奴自身にある力なのか。いや、古老師みたいな技だったのかも」

「人の話しは最後まで聞いたほうがいいと思うよ」

「うげつ……」

「途中で飛んで行くなんて……失礼な」

「飛びたくて飛んだんやない、お前が飛ばしたんや！ てか途中つてなんや、最初から聞いとらんわ」

「……」

瞬動できたらしいフェイトがいきなり話しに参加してきた。もう分身はいなかったが、いつにも増して憮然としていた。

機嫌の悪さは五割増した。

「言い忘れていたけど、君達の作戦の要は既に破壊した」

「……なんだと？」

お世辞にもいい人とはいえないふうに、フェイトは指を鳴らす。すると少し後ろの地面から、石の槍が一気に生えてきた。それを

見たネギと小太郎は、さーっと青くなる。

「何か描いていたみたいだったけど、描くのに時間がかかりすぎたね。目の端に見えてしまったよ」

やれやれというように、肩を少しすくめる。

「次またやるなら、気付かれないようにやるか、気付かせないようにするといい」

ネギは小太郎がフェイトの相手をしている間に、相手の攻撃を吸収し、自分のものとする魔法陣を描いていたのだ。

まだ完成しているかも怪しいその魔法は、フェイトのいう通り今回の作戦の要であった。

「……これで君達は僅かにあった希望を失った。これからどうするんだい？ まあ、両手を上げてもいいよ」

「……ッ！ 誰が降参するゆうたかこの変態半裸！」

「僕達はまだ闘える！」

「……そう」

フェイトは哀れむような無表情で、はあとため息をつく。そして、冷たい目で二人を見つめた。

「……なら、しかたない。でもここから先は、僕は責任を負えないよ」

フェイトは意味ありげに指を触って、魔法発動体の位置を確認する。

指輪の石が、光をうけて輝いた。



「中途半端な強さの人間相手に、手加減はできないね。だから」

その言葉は何故か、冷凍されたように冷たかった。残酷でもなんでもない台詞なのに、ひどく冷えきっていた。

「なにかあっても、君達の責任だ」

「……！」

「…茶々丸さん？ ど、どうかしたんですかー？」

全て聞こえている茶々丸は、遠方で静止している三人を見て固まった。

こうなる可能性だってあると頭では分かっていたはずなのに、やはりフェイトに対する認識が甘かったか、と自分を呪う。

だかのどかには、こんなこと話せない。ネギを好いて、フェイトを信頼しているこの娘にそんなこと言えない。茶々丸は直感的にそう思った。

それにネギ達ならなんとかできる。そうも、思った。

「……いえ。なんでもないです」

「そうですか」

「ん？」

そんな二人の様子を見ていた千雨は、茶々丸になにやら違和感を感じた。

だが、あえて何も言わなかった。

「何故だか君達は早々に屠っておいたほうがいい気がするよ」

フェイトは目を伏せるように下を向く。男性にしては長い睫毛が、いつそう際立つて見える。

気づけば彼は、音もなく消えていた。

そしてまだ残像が目に残っているうちにネギの真上に現れ、ネギの背を掴んで引き寄せる。その勢いで腹にキックをいれ、さらに振りかぶった腕で殴り落とした。予想される着地点に石の槍を生やし、上からも石柱を投げる。

「うぐ…！」

まさに踏んだり蹴ったり。

または至れり尽くせり。

ネギは勢いに逆らうことができず槍に体を打ち付け、石柱をまともにつけた。この間僅か三秒。

「次は君の番だね」

ゆらり、と某腹ぺこ忍者先生のように振り向き、獣化している小太郎を見た。

その目線を外さぬまま指を軽く振り、小太郎の周囲に槍の雨を降らせる。それは小太郎の腕や足に刺さり、その度に小太郎の顔を歪ませた。

次に瞬動で背後にまわり、強烈なインファイトで攻め続ける。近接戦闘が得意であったため、小太郎もある程度は持ちこたえたが、それもすぐにフェイトのペースにもっていかれた。

フェイトは留めといわんばかりに、石で作った簡単な剣で、小太郎の脚の腱を切る。

吹き出た血は、その白い頬を濡らした。

「くっ……そ……」

「獣人は再生力が高いから、当然これくらいはさせてもらおうよ」

フェイトは手の甲で頬を拭いながらトンツと足の先で跳びはね、少し地面から浮いた。

口の中で呟くように、もごもごと呪文を唱える。

すると指輪が赤く光り、白過ぎるその顔を不気味に照らした。

「君達との闘いは楽しかった。また行えるなら、それは僕の望みだ。でもそれも、実現できそうにないね」

ネギと小太郎、ちょうど二人の真上にフェイトはいた。

フェイトは手を軽く振ってから、二人に指を向ける。

「これは“けじめ”だよ　　永久石化」

一瞬にして全てが真っ白になった。

成分21：飛ハサレテ星間飛行（後書き）

近頃サブタイトルがかなり悪い意味で適当です。

## 成分22：言葉狩モ程々ニシナ

十十22十十

辺りは一瞬にして、白い光と霧に包まれた。  
それを見たのどかの目に、熱いものが込み上げてくる。今にも泣きそうな顔に、なっってしまった。

「ネギせんせー……嫌っ」

「何が？」

「っ！！ フェイト、さん……」

そんなのどかの前に突如現れたフェイトは、相変わらずの無表情だ。二人を永久石化したこのフェイトに、のどかは言いあぐんでしまっ。

言いたいことは山ほどあるのに、どれも言葉にならなかった。  
喉の奥にストッパーでもつけたみたいだ。

「……二人が消えて嫌がるのなら、何故君は行動しなかったんだい？  
僕が模擬戦闘で彼らを傷つけない保証なんてないじゃないか。  
悪事の傍観は、それだけで罪だよ」

「……………」  
「君のアーティファクトを最大限に利用すれば、偉大な魔法使い（マギステル・マギ）に値する力を入れることだってできるはずだ」

「…それは」

「できないだろう？ 所詮君は」

「やめんか変態ー！ー！！」  
「ぶっ！……」

フェイトは千雨に思い切り頬を叩かれたのどかは驚いて小動物のようにと止まる。

叩いた千雨や少しバランスを崩したフェイトは、全てマトリックスのようなスローモーションに見えた。

そんなスローの中で、千雨の目だけがギラリと素早く光る。

「このドアホ半裸！！ 言葉攻めも大概にしろ！」

千雨はのどかを守るように立ち、フェイトに指を突き立てた。

一方のフェイトはどこ吹く風で、あまり叩かれたことや変態呼ばわりされたことは気にしていないようだ。

「あ、あああの」

「宮崎、コイツに近付くな。変態がうつる」

「感染するものなんですか！？」

だが千雨の言うことももつともだった。

フェイトは先程の戦闘で上半身裸だったし、のどかに話しかけている時は顔がとても近かった。変態要素満載、だったのだから。

「んで、お前これからどーするつもりだ。先生達を倒して、私達も……倒すのかよ」  
「そうだね。それも悪くない」

フェイトが不敵に笑ったので、千雨は身をかたくした。

その時、フェイトの頭にぼんつと誰かの手が優しくのった。フェイトは誰の手かと思い、反射的に見上げる。

「変態同様、偽悪も大概にしないと、また叩かれるぞ」  
「…マスター」

知らない間にフェイト達の横に、笑顔のエヴァンジェリン（偽）がいた。

フェイトの頭に置いた手で頭部を強く締め付けていなければ、とても平和な光景だ。

「お前、《永久石化》と口で言っただけで、実際は《眠りの霧》を使っただろ」

エヴァンジェリンを見ていたフェイトは、ふいつと横を向く。

「それと魔法障壁の数が少なすぎる。一枚一枚が薄いしな。木乃香の魔力だって、結局押さえこんだようだし、手をぬきすぎだ」

骨に悪そうな嫌な音を立てて、フェイトはエヴァンジェリンに顔ごと方向展開させられた。なので見つめ合う形になったが、それでも目を逸らす。

それが返答だった。

「えっ、じゃあせんせー達はまだ……」

「死んでない、のか？」

ぼかんとして、可愛いらしい顔になる千雨とのどか。

「ええ。あそこで眠っているだけです。命に別状はありません」  
「てかお前はわかってたなら早く言えよっ」

誰かから、漏れるようなため息が聞こえた。とりあえず、皆安心したようだ。

だがこのハッピーエンドな雰囲気は、茶々丸の言葉で崩れた。

「ですが小太郎さんは両足の腱を切断され、ネギ先生は石の槍と石柱に今も挟まれたまま寝ています」

二人の現状は、お世辞にもいいと言えるものではなかった。

女子がざわつく中エヴァンジェリンだけは、ほうと意外そうな顔をする。

「なんだ。お前がやったにしては優しいな。ぼーやや犬なら足や腕の一、二本切ってもよかつたんだぞ？」

気まずいせいか静まり返るその場。

ジョークが本気かわからないし、どちらにせよブラックだった。

エヴァンジェリンは一人で現状を楽しみ、ニヤついている。

「……おい、誰か助けてやれよ」

しかたなく千雨がこの場を仕切る。

千雨の目はいったんのどかにとまり、次にエヴァンジェリンにとまり、最後にフェイトにとまった。

「その無言変態、お前行け」

「え……」

千雨は目で「いいから助けに行け」と指示をだす。

逆らったら怒られそうだし、別に逆らう理由もないので、フェイトは二人を助けることにした。というか助けることになった。



「『ヴィシユ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト　　永……』  
「やめる馬鹿！……！」

千雨がフェイトのすねを蹴る。狙いが地味に痛そうな箇所だ。  
フェイトは顔色一つ変えず詠唱を止めた。

「……冗談だよ」  
「笑えねえよ！」

この後フェイトは千雨監督の元、二人を安全に助けた。  
そう、安全に。

「マスター」  
「なんだ」

「フェイト・アーウェルンクスは、善人なのでしょうか」  
「《善》などは人間が心々持つ勝手な定義だ。だが……お前がそう  
感じたなら、それでいいだろう」  
「そうですね」

茶々丸は、清々しく笑った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9527h/>

---

消された記憶＋純白の敵＋

2010年10月9日05時20分発行